

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

7



第八十四卷 第七号 日本幼稚園協会

# 幼児の音楽遊び〈全4巻〉

小林美実編 B5判 各120～160頁 セット定価5,700円

〈全国学校図書館協議会選定図書〉

「おはぎが」



両手でおはぎをつくる。

「およめにくとき  
は」



片手を口にあて、すまし顔をする。

「あんこときなこで  
けしょうして」



顔をきれいにおけしょうする動作をする。

「きれいなおさら  
にのせられて」



片手をお皿にみたく、その上におはぎをのせる。

「あっというまに」



大きな口をあけてうたう。

「くちのなか」



食べるまねをする。

幼児が音楽を楽しめることを第一とする一方、それぞれに「遊び方」「発展例」を加え保育の状況にあわせ選曲できるよう構成しました。

音楽を媒体として、生き生きした保育を展開したいとお考えの保育者のために、音楽的に充実した素材を豊富に収録しました。

## 幼児の音楽遊び ①

いっしょにあそぼう

小林美実編 120頁 定価1,200円



① いっしょにあそぼう

小林美実編・円野裕子・中山鈴津子共著  
B5判 120頁 定価1,200円

## 幼児の音楽遊び ②

いっしょにうたおう

小林美実編 136頁 定価1,500円



② いっしょにうたおう

小林美実編 神山種子著  
B5判 136頁 定価1,500円

## 幼児の音楽遊び ③

おどってみよう、  
たたいてみよう

小林美実編 著 160頁 定価1,700円



③ おどってみよう、  
たたいてみよう

小林美実編・著  
B5判 160頁 定価1,700円

## 幼児の音楽遊び ④

幼児の生活と  
行事の歌

小林美実編 著 136頁 定価1,300円



④ 幼児の生活と  
行事の歌

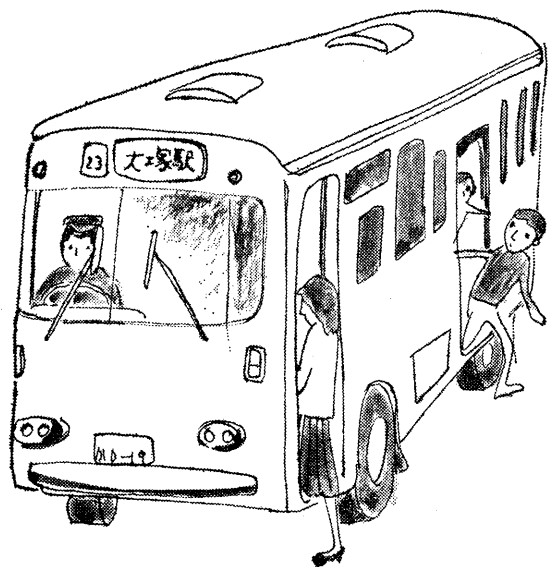
小林美実編・著  
B5判 136頁 定価1,300円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館

# 幼児の教育



第八十四卷 第七号

# 幼児の教育 目次

## ——第八十四卷 第七号——

© 1985

日本幼稚園協会

忍耐と愛と祈り……………大槻 虎男…(4)

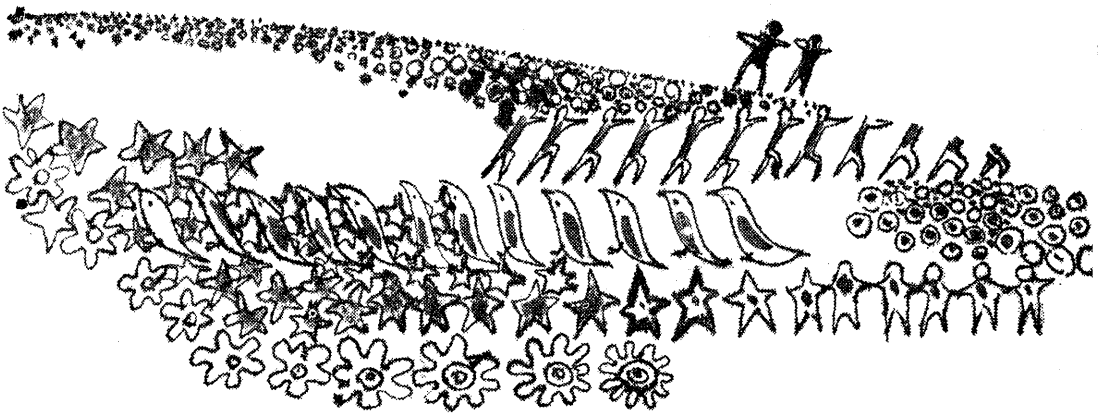
S F 的読み解き 子どもという風景

第五回 身体と知の掛け合い……………堀内 守…(8)

養護学校の日々……………津守 真…(17)

「いじめ」の心理について (後編)……………内田 安久…(22)

兔園随筆⑩ 「おいしい」……………燕木 寿江…(28)



大人、子ども、コトバ

——「ウサギの子殺し」をめぐる……森下みさ子……(32)

若いお母さんたちへ……はるにれの会 山本 直子……(38)

子どもと水……草信 和世……(46)

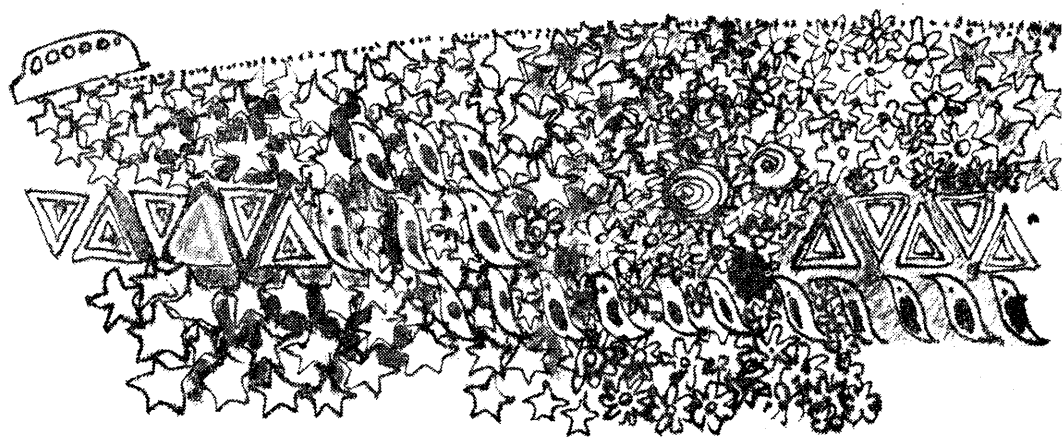
教育実習ノート……(49)

子どもたちのこと 五……大橋利恵子……(52)

ヤミ族の子供の問題から学ぶこと……乾 淑子……(56)

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』(岩崎美術社刊)より

カット・福田理恵



## 忍耐と愛と祈り

大槻 虎男

去る世界大戦中、女高師の植物学教室で新薬ベニシリンの研究が行われていた。空中からアオカビの新菌株を捕えて、その製造に成功した。当時の附属幼稚園長の倉橋惣三先生、教育学の菅原教三先生も時々顔を見せて奨励を賜った。倉橋先生の依頼で幼稚園勤務の清水さんに新薬の配慮をしたこともあった。戦後及川、菊池両先生とも時折顔を合せた。

右の御縁で本誌に執筆依頼を受けたが、根が一介の不敏な自然科学徒のこと、かきかけでは筆を折る始末であったが結局一文を書いた。日頃幼児教育に専念される皆様の御苦勞に謝したい心持ちに他ならない。先ず二人の科学者と一人の伝道者のことを述べる。

一、フレーミング（一八八一—一九五五）はスコットランドに幼時を送り、後にロンド

ン大学に入学、卒業の際は多数の賞を一人占めにする優秀な成績で、医学者となった。碩学病理学者アームロース・ライドに将来を見込まれて、細菌学の研究に従事した。小柄で無口、社交べたのこの青年は当時唯一の消毒薬であった石炭酸の副作用を知り、それに代る理想的な殺菌作用を持つ新薬を夢み、これに一生涯を捧げた。偶然のことが彼に幸して、ペニシリンを捕えた。二八年の星霜がこの間に過ぎ去っていた。喰い付いて離れない忍耐が一事を成し遂げるのに大切であることを説示する。人間の平均寿命が幾百年に亘り五十才台を低迷したのに対し、抗生物質の発見により急上昇し、最近二十年間に八十才に達したのは彼のおかげといえる。

二、クラーク（一八二六—一八八六）は明治九年、北大の前身札幌農学校に招かれた。彼は二十才から二年間ゲッチンゲン大学に学び、化学の学位を得て帰国したが、在学中はむしろ植物生理学に興味を持ち、帰米後はその方の科目をマサチューセッツ大学で受持った。樹液上昇の研究は有名である。札幌でも植物生理学と英学を担当した。授業前に聖歌を歌い、聖書を読み、祈禱を献げた。時の開拓使長官黒田清隆は、国法に反すると注意したが、聖書なしに学生の教育は出来ないとして、長官を黙さしめたと伝えられる。フレールが幼稚園を起してから四十年後に、日本最初の幼稚園が東京女子師範学校に附設された。それが明治九年で、偶然ながらクラーク来日の年と一致する。

科学重視の教育の重んぜられた時代に、田舎者の青年達に物心一如の精神を植え付けた。しかも今も尚日本青少年の心の指標として生きている。僅か、八カ月の札幌滞在が一

体どうしてこのような深甚な結果を残したのか。

彼の学生に接する真の愛と、その影にあった天地を支配する全能者に対する祈りとから生じたのではないだろうか。彼の科学と宗教との渾然一致の精神を継承した一人は内村鑑三である。札幌農学校卒業後科学者として水産動物学を研鑽したが、数年で、伝道生活へと道を変えた。「聖書の研究」と題する月刊誌を発行し、聖書を読む態度に科学的方法を導入した。これは科学者にして宗教者たるクラークの歩んだ道と同じ精神であった。

三、シュバイツァー（一八七五—一九六五）は牧師として出発し、後に医学を学んだ伝道者である。南アフリカのオゴエ河上流の奥地ランバレーネに極貧の原地人に医療活動を行い、九十才で蛮地に没した。数多い著作の中に「イエス伝研究史」がある。聖書記事の非科学性―処女降説、死者の復活、病者の癒しなど―はドイツの科学者のキ教に対する絶好の反対材料であった。科学者としての彼はこれを乗り越えた。自伝の中に次のように述べている。

「信仰と史的真理とを正しい意味で相容れるよう努力することは容易ならざる任務である。しかし私はこの天職に悦んで身を献げる。真理はすべてに於てイエスの精神に属すと信ずる故に。」

今や医薬その他自然科学の成果はめまぐるしい。しかしそれですべてが割り切れるものではない。彼の中に生れ育った人類愛と全能者の前に跪き、これに捧ぐる祈りがこの忍苦の大事業を死の直前まで継続せしめたのではないだろうか。



科学(物)と精神(心)とは一人の体内に共存し、それらが更に高次元の同一の法則の支配を受け乍ら外界と反応する。生後間もない時代の軟らかい幼な子の心身の発達にこれが如実に見られる。幼児は授乳の数カ月を過ぎて、自我の目覚めが進行し、自律性が之に続き、次に自分の外にも自我の存在を知り始める。幼稚園保育の時期である。これに続いて少年、青年、熟年、老年と進んだときにこの初期の心身が基礎となり、良きにつけ、悪しきにつけ、廓大され、固定されて行く。

「この小さき者の一人に罪を犯させる人はその首にろばの礮石を頸にかけられ、海の中に投げ入れられる方がましである」(マルコ九・四二)

幼な子に接する人、特に教育者にとって恐ろしい言葉ではないか。

エルサレムに滞在したときに彼に心をひかれたユダヤ教の教師ニコデモが夜間ひそかにイエスを訪問した。イエスは「人もし新たな生れずば神の国を見ること能わず」と説いた。これに対しニコデモは「年をとってからどうして再び母の胎内に戻ることが出来ましようや」と嘆息したという。(ヨハネ三——一五)

この記事も出産前後の比較的短時日における人格の基礎の形成とそれに続く幼児期における教育が如何に重要かを示唆していると思う。幼児期を過ぎてその後神の国を見るのは奇蹟であるということを告げたのである。幼児教育者は実はこの奇蹟の片棒を担いでいるといえる。愛と祈りと忍耐でこれを持ち越えなければならない。

## SF的読み解き

子どもという風景

# 第五回 身体と知の掛け合い

堀内 守

## SF的とは

この辺で「SF的」と題した理由を考えてみることにしたい。

「SF」とは scientific fiction の頭文字だと言われている。ところが、実はいろいろな説があつて、それぞれが「なるほど」と思わせるから楽しくなる。scientific fan-tasy の頭文字であるという説もあるし、最近ではざら

に speculative fiction とか speculative fantasy という説も有力になってきている。このうち、まことに面白いのが speculative の柔軟さである。それは「観想する」「沈思する」「思弁する」というような意味もあれば、「思惑<sup>くわく</sup>をやる」「投機をやる」というような意味もある。つまり、哲学的な概念から商売の用語にまで広がり、重々しい意味からいかがわしい意味まで含み、そのどれ

をもって「SF」の「S」の意味と見なすべきかの選択に迷うほどなのである。ところが、それなる故に、このことばは選びとる人にはねかえってくる。

こういう「はねかえり」のことを哲学的に表現すると「再帰的」ということになるか。要するに、ある意味を選ぶと、選んだご当人の力量のていどを映し出してしまふというのに似ている。

こういうとき、人はいろいろな態度をとる。「そんなに多義的なことばなどなぜそのままにしておくのか」「意味を一義的にしてしまえ」「閑な人だけが選べばいいさ」「もうやーめた」等々である。しかし、逆に、「多義的であるなら、文脈で明らかになるはずだ」と見なす人もいる。その先には「ことばの多義的なのは柔軟な証拠だ」とばかりに張り切って、これらの概念を戯れる人も出てくるに違いないのである。

「子ども」などはさらに複雑な存在である。だからそれだけに「子ども」について考えるには一筋縄ではいかない。とはいふものの、私たちは通常かなり巧みに「子ども

も」とつき合ってもいる。

「子どもは複雑な存在である。だから、それが全面的にわかるまで手を出すな」などとはだれも考えない。それこそ、その場にに応じて「観想」したり、「沈思」したりして手をこまぬいてはられない。のっぴきならぬ形で「思惑的に」対応して、日々新たにその場を乗り越えてきている。そして、いつのまにか「子ども」と共に何やら、以前には思いもよらなかった世界に連れ出され、いろいろなことを勉強させられているのである。

さて、この「勉強」だが、それは常識的にはわかり切ったことのように思われている。「勉強しなさい」というのがひたすらまかり通っている。けれども「勉強しなさいよ」には別の意味もある。脈絡を変える。すると、「勉強しなさいよ」「あ、勉強しましょうか」というような会話はまさに商人のことばに変じてしまう。「値引きしなさいよ」「あ、安くしておきます」というようなことになるわけである。

## 再帰的

「再帰的」とは行動の脈絡を担っている。のっぴきならぬ形で、思惑的に（手さぐりしながら）何かをやる。うまくいくと「やれやれ」とほっとする。反対の場合は「しっぺ返し」がくる。痛さが失敗を告げてくれる。再帰的という概念はこんなぐあいにブーメランよろしく生きた行動とか生きられたる経験などの広々とした領野を切り拓いてみせるし、さらにレンズのようにもはたらく。

「子ども」という概念も本当は再帰的なはずである。

たとえば、こんな例をあげてみることにしよう。

クラークスが報告している観察例はいろいろなことを考えさせる面白いものばかりである。（クラークス・杉浦実訳『リズムの本質』みすず書房）

こんな例が挙げられている。三分の一秒という間隙で、つねに同じ強さで金属製の台をハンマーで叩く。当然音は同間隙できこえてくる。

ところが、しばらくきいていると、その音は私たちの耳にははつきりと二音ずつに分節化された上、強弱（あるいは反対に弱強）の音のグループが反復されているようにきこえ出す。

物理的には「カン、カン、カン」というように同間隔で響いているはずなのに、私たちの耳には、トン、「カン」「トン、カン」の反復のようきこえたり、あるいは「トーン、カン」とか「トン、カーン」の反復のようきこえ出す。

光の点滅などの場合でも同じようなことがいえる。

「ピッカ、ピカ」。

時計の時刻を刻む音の表象もそうである。ほんとは同間隔で、単調な音の連続にすぎないのだが、私たちの耳には「カッチン、カッチン」ときこえたり、「チック、タック」のようきこえたりする。まさに拍子である。

この強弱の拍子をつくり出しているのは、私たちの生ける身体にほかならない。私たちの生ける身体は、同一間隔の単調さに耐えられないのである。だから、そうい

う単調さをこねまわし、リズムをつくり出し、拍子をつくり出して、やっと安心するのである。

### 分節化

この分節化のはたらきこそ、私たちの感性と知性の掛け合いをもっとも純粹な形で知ることのできる場面である。私たちの感性は単調な音の反復を受けとめる。ところが、それに対し、知性はそれに「かたち」を与え、「リズム」を与えてしまう。

もしこのはたらきがないならどんなことになるだろうか。客観的には強弱音はないのである。しかし、感性は単調な音の反復を伝えてくる。これに知性が手を加えることなく向かい合っているとすると、知性はいだちをおぼえるだけである。いいかえると、知性は空をつかむだけで、雑音、無意味な音としてしか受けとめないだろう。

しかし、実際には知性はまず分節化を試みるのである。

日常私たちが「子どもじみた」とか「子どもくさい」とかいうような表現で軽くあしらいがちな問題、たとえば「ワンワン」「ニャンニャン」「オテテ」「オメメ」などからリズムのあるしぐさや行動に目を向けていくとき、まずは右のような分節化を一方の極に置いて見るか否かではまったく結果は異なってくるだろう。

「SF的読み解き」とは、たとえばこのような試みなのである。

それは「思惑的」かもしれない。「冒險的」かもしれない。しかし、リズムやタクトの問題を経てきたいまではもっと動くゆがような表現も可能のようである。すなわち「胸がわくわくするような」試みであると。

さて、その「わくわく」だが、これを声に出して何通りにかに読みあげてみよう。テープレコーダーを活用してみると面白からう。何と、私たちは、たったいま説明してきた分節化を幾通りもやることができるのをあらためて発見していくことになるのである。

「わくわく」はときめき、律動感を表わす。これを声に

出して読むと、二つの「わく」の高低、強弱が自然と異なって読まれているのが確かめられよう。はじめの「わく」とあとの「わく」は決して同じ拍子で読まれてはいない。

### 数奇な物語

クラージェスの『リズムの本質』は、数奇な運命をたどってできあがった本である。

最初は講演の題として提出されたのだった。一九二二年のことである。ベルリンで中央教育協会主催の「芸術体育集会」が開かれた。(こういう集会は今日でも開いてみたいものの一つですね) その集会の基調講演がクラージェスに依頼されたのだった。自然に即した運動の理論の一般原理について提出してほしいというのである。

ところが、集会の三日前になって、クラージェスは病気になるってしまう。講演は断わらねばならなくなった。

翌年になって、右の集会の報告書が編まれたとき、クラージェスはその報告書のなかに、講演するはずであった

内容を書きおろして加えてもらうことにした。因みに、報告書の題は『芸術体育』であった。

クラージェスのこの論文のテーマは、まずリズムと拍子が異なった由来をもっていることを明らかにし、ついで双方が相反する性質をもっていることを示す。ひいてはそれが生命と精神の対立から派生していると主張するものであった。

この考えは、生物学、表現学、医学および体育学などの分野で受け入れられた。誤解されることもあったし、いろいろな発想を刺激する契機ともなった。

### 民間学者

クラージェスは、一八七二年に商人の子として生まれ、一九五六年夏、スイスのチューリッヒ湖畔の町キルヒベルクで没している。

いろいろな大学を移り歩いた。はじめに入学したのはライプツィヒ大学である。そこでヴェットなどの心理学を勉強するつもりだった。ところが、ヴェットの講義に飽

き足りず、ハノーファーの工科大学に転じる。そこを経  
てからさらにミュンヘン大学に転じた。ここでは感情移  
入説で有名なテオドル・リップスの心理学に関心をい  
だいたようである。

学位は実験化学の分野で論文を書いて取得した。

大学には失望し、終始民間の学者として活躍した。

主著の完成はクラীগスの六十歳の年のことである。

たくさんの書物を書いた。全集の内容を分類してみる  
と、その関心はまことに広いことがわかる。哲学、性格  
学、表現学、筆跡学、言語学、文学等に及んでいる。

ところが、私たちの「SF的読み解き」の観点から見  
るならば、クラীগスのこの『リズムの本質』は、「子  
どもという風景」を一段と鮮明に、かつ奥行きのある形  
で照らし出してみせる本でもあるのだ。

彼は「リズム」と「タクト」を区別し、「リズム」を  
無意識的自然反復運動だと呼び、「タクト」を意識的人  
為的反復運動と呼んだ。

楽しみながら書いているところもある。ドイツの民謡

の分析などもあり、なかなか面白い。かと思うと、例示  
や比喩を巧みに使う。

拍子タクトが同一者の反復だとすると、リズムは類似者の再  
帰だとのべ、再帰は過ぎ去ったものの更新だと強調す  
る。

このあたり、表現が硬いようだが、平たくくだいてみ  
るよりも、原文のリズムを味わうのも面白いかもしれな  
い。若い頃詩を書き、詩人のシュテファン・ゲオルゲと  
いっしょに詩作活動を行なったことのあるクラীগスで  
ある。リズムやタクトの問題から詩作の次元にまで論を  
進めるのは楽しかったに違いない。そういう躍動感が彼  
の文章からうかがえるように思われる。

読み込み過ぎだと非難されるのを恐れていると、それ  
らは取りのがされてしまうだろう。

たとえば、こんな文章にぶつかる――

「とくに人間の肉体的および精神的生活を観察するなら  
ば、なおさら、人間生活を遅滞なく完全に支配している  
リズム現象にぶつかる。すなわち脈搏、呼吸、女性の月

経、体重の日毎年毎の変化、身長の日毎の変化、そしてたしかに身体の変化に起因するところの、仕事の喜びによって感情が昂揚した時と冥想的内省を求める時の交替、などが想起される。ロマン主義の啓学はここから古代の数表象に遡ることができたのである。そのことをつぎの機械時代の人は嘲弄した。現代人はそれを模倣しようとした。その際、「だが現代人は」予見しうるとおり、「単なる」算術に脱線した。」(杉浦実訳『リズムの本質』みすず書房、六一ページ)

執筆を楽しんでいることがここから読みとれないだろうか。思いがけない羅列、その組み合わせ、みずからの体験を加え、わずか数行のうちに古今東西の表象をあざやかに取り出して見せ、ふたたび叙述の調子を整え直していく。クラীগスのスタイルにはたしかにリズムがある。

### S F 的読み解き

一定の間隔を置いて響いてくるハンマーの台を打つ音

は単調である。そういう簡単な事実から出発して、クラীগスは、その無意味な単調さを素材にして強弱(あるいは弱強)の拍子をつくり出しているのは私たち自身にはかならないと説いていく。発端はごく平凡な事柄からはじまっている。さりげない形ではじまるからその新奇さにあまり驚かされないが、クラীগスはちゃんとそのことも折り込み済みだったようである。別のところで彼は、事物がはじめて知覚されるときには新奇性があるが、二度目にその事物を見ると、既知性が驚きを軽減してしまい、百度目の知覚がなされるときには、事物は習慣性を得て、もはや人の注意をひかなくなると語っている。「はじめて」「二度目」から「百度目」と飛び、宇宙の星雲から極微のバクテリアにまで話が飛ぶ。そしてまぢがった説に対して遠慮のない罵言が飛ぶ。「高慢ちき野郎」などということばは出てくるから、読者は思わずぎょっとし、文脈をたどり直して、あらためて「なるほど」と感心したりするだろう。

クラীগスの考え方が音楽や踊りや体操のみならず、



詩作にも広がっているのはこの著作からもわかるが、詩的律動や詩的映像について考える上で、有力な手がかりを与えてくれるので、それをまとめておこう。

クラゲスは、湿地ではわずかに指ほどの長さにしかり根をはることもない植物が、砂漠の砂のなかで数メートルの地下にまで根を伸ばしていくと説き、そこから、生命体は一定の抵抗に合うとかえって生命力をはげしく躍動させるのだと見る。だから生命の自由なリズム運動も、一定の条件下で知性によって分節化されはじめてその振幅と特徴をはげしくするだろうと説いた。ここからうかがえるのは、このようにたかめられたリズム運動だけが日常生活のリズムを超えて、生命に満ちた感動へと私たちを導くということである。

感性は生命リズムを受け入れる。知性は生命リズムを分節化する。両者の掛け合いがもつともにぎやかにあらわれるのが子どもの世界である。

## 時計の音？

最近の時計は音を発するものが少なくなった。聴覚的な対象から視覚的なものへの変換が顕著になっている。

もはや「チック、タク、チック、タク」とか「ポーン、ボン」ではなさそうである。だが、いったんできあがったこれらの表現は、本物の時計がそういう音を発しないからといって、そうかんたんに消えはしない。子どもに言わせれば、ジェット機の音はいぜんとして「ブーン、ブーン」だと言う。新幹線は「ジュワーン、ジュワーン」だし、「センセイ、オハヨウ、ゴザイマス。ミナサン、オハヨウ、ゴザイマス」だって、「イタダキマース」だって、ちゃんと分節化されている。彼らはクラゲス以上にクラゲス的なのである。

デジタル時代の数字は秒の表示面で一秒ごとに変わる。等間隔に変わるのだが、あらためて眺めると、強弱（あるいは弱強）のグループから成っているように見えてくる。「イチ、ニイ」あるいは「イーチ、ニ」オイチ、ニイ」。鮮明な映像を結ぶにはこのような分節化作用が必要になってくるのである。

## リズム運動

リズム運動を行動の面から考えてみる。たとえば四拍子のリズムは、子どもの日常のテンポよりやや速いところにあられる。リズム運動としては安定している。しかし、駆け足以上になると、二拍子のリズムがあらわれるだろう。しかし、三拍子のリズムでは走れない。意識的に試みればとちる。なかなかむずかしい。結局、ゆるやかにやるしかなくなる。では逆に、歩くのは困難になるほどゆっくりと足幅を広げてみることにしよう。そうすると、面白いことにふたたび二拍子があらわれてくるのがわかる。

そこで次の実験をやってみる。

五拍子のリズムで歩けるかどうかためしてみよう。五拍子のリズムはむずかしい。五歩ずつ、たえず考え考え緊張していかないことには歩けない。五拍子のリズムで歩くにはこのように、つねに「歩いていること」を自覚しないと不可能だということがわかる。では、二拍子の歩

きはどうか。それならほとんど無意識のまま（自分がいま歩いているということを自覚しなくても）歩いていける。

さて、私たちのスペキュレーションも意外なところに進んできた。幼児の生活のリズムは通常予想される以上にダイナミックなものである。区画整理された知識のどれか一つの区画に住んでいると、こういうダイナリズムはなかなかわからない。しかし、そこから少し広場に出てみると、思いがけない手がかりがたくさんころがっている。子どもの風景はそれらを素材としてあらためて組み替えられる。

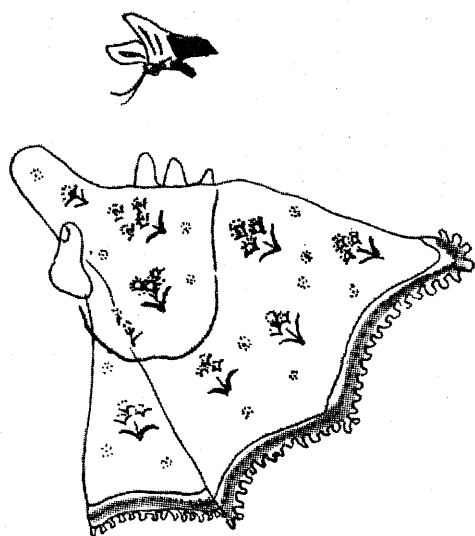
私たちが立ち合うのは感性と知性の瞬間であり、身体と知の掛け合いの開始を知らせる開幕の場である。

（名古屋大学教授）

写真を見ること——行為の解釈と保育の実践を

めぐって

津 守 真



Hは、棚から写真の袋の束を取ろうとする。「だいたいなものだから気を付けて」と云って手を出すと、写真を引き出して床の上に散乱させてしまう。私が気持をかえて、棚から取りおろすのを手伝い、一緒にそれを見ると、Hは熱心に写真をながめている。しばらくすると、写真をもとの棚にもどすことができる。ときによると、Hはネガをとり出し、透かして眺めるが、整理されたネガの順序が狂わないかと私は内心で心配しながら、一緒

に眺めて、元にもどす。ときによって、Hがこわがっている子どもの写真を見つけると、サインペンで顔をぬりつぶしたりする。写真が破損しないかと恐れながらも、この子どもが写真を見ようとする欲望には強烈なものがあって、他に気を散らそうとしても、それはほとんど不可能なほどである。そんなに写真に興味があるならば、大人の生活の秩序が乱されないようにながら、子どもの興味をみたくようにしようと考えて、私はHと写真とに、何週間もつきあってきた。

だが、子どもがあることに興味をもつというのは、どういうことなのだろうか。それが単に面白いということだけではなくて、その子どもに面白さと呼び起す、更に深い関心の世界があるのではないか。子どもと一緒に生活する中に、いくつもそのヒントは見えているのだけれども、實際生活に巻きこまれ、行為の事後的側面だけに目を奪われて、その行為をしている子どもの世界を見る目を失ってしまふ。後になって、自分自身からも、現象からも距離をおいて、反省的思考に上らせるときに、現

象の全貌が見えてくる。それは、しばしば、同じ子どもの保育に参与している他の保育者たちと話し合うことによって促される。自分が手さぐりして考えているときに、類似の現象を、子どもの世界にまでひろげて思索している人の話をきくことが、自分の思考の束縛をこえて想像力をはたかせることを可能にしてくれる。

三学期を終えて、幾人かの子どもをめぐって研究会をしたときに、Hを担当していたもうひとりの保育者が、Hは泣いているときに、鏡の前について自分の顔を見るということ、それは何だろうかと考えているという報告をした。それに対して、他の保育者が次のようなコメントをした。Hは大勢の子どもたちのいる保育室の中では、自分自身を見失うのではないか。Hが恐怖を感じている子どもが何人もいることはそれを示すであろう。すなわち、Hは内的存在感が不確実なので、鏡を見ること、つまり自分を外在化することによって存在を確かめているのではないかと思われるというのである。

\* 柏木静子      \*\* 榎沢良彦

写真も、鏡と同様に、自分や他人を印画紙の上に外在化して見せる。Hが恐怖を感じている子どもの写真を見つけると、Hはその顔の上に、更にサインペンで印しをつけて、その存在を確かめる。恐怖をもつというのは、それだけ強い関心をもっていることでもあって、実際、Hはその後、その同じ子どものところに玩具を持っていったり、その顔にえのぐをぬりにいたりした。Hは、その子どもをどのように理解したらよいか分らず、否定的感情と肯定的感情との間を揺れ動き、現実の場におけるHのその子どもについての内的存在感は、不確定であったろう。写真という動かない形に外在化されたとき、Hは思うままにそれを眺め、手に持ち、机の後に捨て、あるいは印しをつけて、その存在を確かめることができた。

写真を見ることが、内的存在感の不確かさと関係があるだろうということは、私共の身近な写真体験からも考えられる。私共は、死んだ人とか、むかし別れて会うこととの少い同窓の友人など、存在感の不確かな人たちの写

真を喜んで見る傾向がある。場所についても、普段住みなれた自分の家の、内的存在感の確実な場所は滅多に写真に撮らず、再び訪れることはないかもしれない場所に写真に残す。

身近な子どもの観察からも、同様のことが云える。子どもは、自分が赤ん坊だった頃の写真を見ることが好きである。親にとっては、子どもが赤ん坊だった時も存在したことは疑うこともない確実さをもっている。しかし、子ども自身にとっては、自分の赤ん坊時代の記憶は不確定である。それはもしかしたら存在しなかったかもしれないと疑う。自分の赤ん坊時代は、親が話してくれたから存在するので、自分自身の記憶としては極めて曖昧なのである。しかし、写真を見るとときに、それは外的に確認され、子どもは安心する。

私自身の体験からも写真とのかかわりの変遷を考えることができる。私は現在、子どもの記録写真を以前ほど撮らない。それには他にも理由があるように思うが、その場で客観的観察による記録を残すよりも、その体験が

過ぎ去ってから、それが新鮮なうちに主観と共に書き残すことに重点をおくようになってから、写真によって記憶に残そうとする気持が減少したことは確かかなように思う。体験の主観を含めた記述は、その体験の存在の内的確実さを疑うことができなくしているので、写真という外在化された形をことさらに必要としない。(もちろん、私は写真記録の不必要を云っているのではない。それは別の観点から、必要な場合は多い。)

子どもは、自分の体験を言語でも表現しないし、文字で記録に残さない。それだけに、写真を見るということ、子どもには、大人とは違った、より大きな意味をもつだろう。

以上に述べた写真についての解釈は、日月積重ねられる保育の中で、その妥当性が確かめられる。

ある日、Hは小学部の大きい子どもたちの箱の製作品を置いた場所にいったとき、牛乳容器を組合わせた製作品を直ちに取り上げた。それには、色セロファンの板を

押し込めるようになっていて、カメラと名付けて子どもが作ったものであったことが、後になって判明した。また、三学期最終の日に、昼食のあと、小学部の子どもの場にアルバムが渡されたとき、Hはたまたまその場に行ったが、Hは最も熱心にアルバムを見ていた子どものひとりであった。写真を見るということは、Hから取り去ることも、止めることもできない、重要な意味をもつものであることが確認される。

このように考えると、Hが写真を棚からおろして見たがるというのは、単に写真に興味があるからというだけでは済まされないことがわかる。それには、自分についても他人についても、Hには、内的存在感が不確実なことがその根底になっていることが推察される。前々月号に、私は、Hが食物を足で踏みにする行動について記した。私は、この行動を、自己実現の体験の欠如に由来すると解釈した。これも自分自身の存在の価値にかかわることである。同じHが、写真にこのようにこだわるの

も、存在感の不確実さに由来すると考えると、Hは、自らの存在の根底について確かさがもてないことで悩んでいると考えられる。可愛らしく見えるHの保育に参与して、このような行為に何度も立ち会っていると、その愛らしさの中に、この子どもの深刻な悩みを感じるのである。そして、この子どもが、そんなに写真を見たがっていたのに、どうしたら早く写真の場面をきり上げるかを考えていた自分自身の洞察の不足を、あらためて認識させられる。Hがこのように熱心に写真を見たがる行為を、肯定し、一緒にその体験に参与し、その活動を拡張し、その行為の意味を深めることができたならば、どんなにかよかったですであろう。問題は、子どもの興味と大人の生活の秩序とを、どのように妥協させるかということではなかったのだと思う。子ども自身の存在にかかわる悩みがそこにあつたのならば、それにいかにこたえるかが保育の課題であろう。

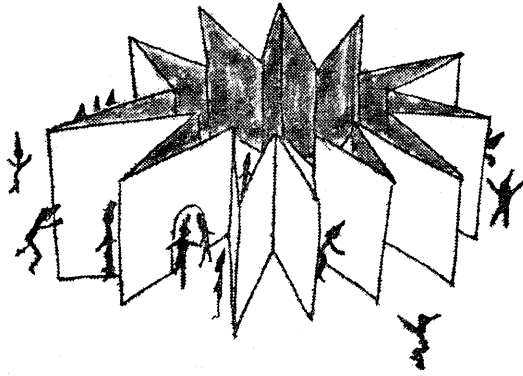
反省的思考の段階で到達した解釈は、絶対的結論ではない。次の実践に臨むときには、その解釈は再び保留し

て、新鮮な眼で新たな一日に向うのが保育である。そこで子どもを信頼し、子どもと親しんで、共に時を過ごすから、子どもの新たな行為が生れる。その行為の意味を見出すことができたときには、保育者は子どもにも自分にも肯定的に向うことができる。反復される行為には、過去の体験に由来する悩みが表現されるのみでなく、それを解決してゆく可能性もまた含まれているにちがいない。意味を見出すということは、未来への可能性に目を開かれることである。三学期の終りに、わずかの時だったが、Hと一緒に写真を見たときのその熱心さは、未来への糧となつていた時であつたと思う。

(愛育養護学校)

# 「いじめ」の心理について（後編）

内田 安久



動物は、縄張りや食糧や異性のことで流血の死闘を演じることはあるが、負けた相手を、悪追いするようなことはない。と云う。サッパリとしている。いつまでも意地悪く相手をいじめたりするのは、人間ぐらいだけかもしれない。知能が高いことは、慶すべきか弔すべきか、ちょっと考えさせられることではある。

いったい喧嘩とか闘争とかいうものは、伯仲した力の衝突であるから、激しい場面が展開されても、一方が負ければそれで終る。陽性とも云える。それに反していじめの場合は、一方が優位にあって他の弱者をいためつけ、自分の威力を示そうとするものであるから、相手が苦境におちればおちいるほど、その力を強化して自己満足の領域を拡大させようとする。それが自己陶醉（ナルシシズム）



的になると、相手の苦難の限界など見境もなにもなくなってしまう。いや、最初からそのような能力のない幼児的心理のもち主なのかもしれない。だから案外いじめっ子自身には、強い者には弱いのでわざと弱い者を選んでいじめの対象とし、そこで自分の優越感を味わおうとするような者が多いのではあるまいかと推察されるのである。その証拠には、相手の弱さにつけこんで執拗なまでも喰いさがる。ある場合には、自分は蔭にかくれていて、機会をみては自己顕示的姿勢を閃めかしては脅しかかる。弱いからであろう。このようないじめは実に陰湿で、ともすると残忍にまで進展する。現今のいじめに、こうした型が多いのは、いったい何故なのである。

思うに、現代の若者たちは、一般に恵まれすぎた生活のなかで温室的速成栽培され、頭は早熟化しているが、根元はしっかりしていないように育ってきている。そのため、外見はりっぱだが、なか味は未熟で甘い味のまま無気力・無関心・無責任のシラケた状態にあると云われ

ている。それに早熟化の年齢が年々低下してきているのに対し、社会から一人前として認められるのは大学を出たぐらいからと延びている。その上下のひらきが余りにも大きい。しかも生活は大部分が親がかりだ。働かないですむ。昔は十五歳ぐらいで元服し、大人扱ひされた。今は受験勉強を除けば、すべてが余暇いや全暇である。

幼児がそのまま身体だけ大人になったような身にとっては渡りに舟である。勤労はいやだ、楽の方がいい、大人なんかに成りたくない。そこで、「モラトリアム人間」(執行猶予的人間)とか「マン・チャイルド」「シンデレラ・コンプレックス」「ピーター・パン・シンドローム」「青い鳥症候群」などいろいろな異名を戴いて、現代若者たちの生態が世論をにぎやかすようなこととなつてきたのである。

ところで、彼らの肉体は大人並みでも、精神面は幼児的(退行現象ではなく維持保留現象)なので、受験勉強や塾通いで阻止されていた遊びへの回帰志向が猛烈になり、それで全暇を埋めつくそうとする勢になった。だが

その遊びが問題なのである。形式は大人並みだが実態はちがう。幼児的傾向から脱却しきれないのである。元来、大人の遊びは仕事や生活上の労苦からしばしでも解放され、ゆとりを得たいという意味のものだが、若者のそれは逆なのだ。むしろ遊び自体が生活で、在学・就職・バイトなどは遊びを支えるための腰掛けに過ぎない。しかもその遊びには、強い刺激が欲しい。若い血気の捌け口のためである。けれども、若者には節度というブレーキの不整調なものが多い。とかく脱線しがちである。自由・平等・自己顕示の旗印はよいが、無秩序では自己統御すらおぼつかない。そこに見栄や虚勢が手を貸すので、結局前述のようないじめの様相が現出されるということになるのであろう。

そうした意味で彼らのいじめは、自ずからの空疎な心の寂しさを遊びに托したが満たしきれず、遂に幼稚な行動に走ったものと解釈するのは酷にすぎるかもしれないが、とにかく彼らの多くはその過去に、健全な遊びを十分に経験することが出来なかったのではあるまいか、と

推定されるのである。真の遊びに恵まれていたとしたなら、自然のうちに自ずからが正しく生きてゆくに必要な生の力と信念とを、身につけているはずと思う。そうなら、自信があるから焦る必要はなく、心が安定していれば、たとい不安が生じても、何とか調和がとれるはず。調和がとれているところに、暴力が発生するわけがない。遊びのつもりで暴力をふるうのは、すでに遊びから逸脱した心の歪みの現われと見るのが妥当の線であるう。

現代若者に見られるいじめの構造を、遊びの側面から考えてみると、極めて幼児的性格を帯びたものであることが知られた。では現在の幼児の遊びは、どのような配慮のもとに取扱うことが、幼児将来のためにもなるのであろうか。その要領を考えるのも無駄ではあるまい。

現今の園児の遊びは、配慮もよく届き、設備もりっぱになり、実に恵まれている感じがする。ただその反面、

社会状勢の歪みから、自由な幼児の自然性が阻止されたり軽視されたりしている点が見られるのも否定できぬ。

そのため幼児らは、一般に機械的感覚的反応には敏活だが、刺激のつよい新奇なものへの心ひかれることに急のため、触れたものを十分噛みしめて吸収し、ゆっくり消化する余裕などえられにくい怨みが認められる。その結果は、すぐに飽きやすく、態度も自然に受動的となり、ついに物ごとに無関心となる傾向までが現われる。飽食による倦怠症候群とでも呼んだらよいか。そうした場合の策としては、与える遊具は少なくし、あまり精巧な機械的なものは持たせない。そして、むしろ素朴な単純な品、たとえば、木切れ・布切れ・空箱といった手近なもの、あるいは廃品や部分品など、日常身近で見すてられているような物に、特に注意を向けさせるようにする。そして、その利用や再生などに創意工夫を加えさせてみるのである。同時に物を大切にすることを自覚させ、ひいては他人に対する愛情ともつなげるように誘導する。すでに時代は使い棄ての期から進んで、いかに物

を活かすかの時代に移りつつあるのである。

物の関係から人間の関係につながるとすれば、その絆(ぎずな)ともなる協力とか連帯とかが、成長の後の孤独感からの解放や、他者への思いやり、義務や責任への自覚などを推進するための基礎ともなる。自己形成は、それらが極めて必要なのである。

そのためには、幼児の遊びの中にも集団と集団とで技を競う種類のものが、数多く加えられることが望ましい。以前には陣とり・人とり・子とりなどという適当な遊びがいろいろあった。そうした中で、内気な子は群での義務や責任上、勇気を出さざるをえなくなるし、また出しやすさを修得したものであった。また集団の中で自分勝手は通らないので、自然に忍耐力もつく。このような体験は、おそらく現在の家庭環境のもとでは不可能であろう。園に要望されるものである。また今の子どもは喧嘩らしい喧嘩の経験に乏しい。だから手心がわからず、無茶になりやすくとて、金沢嘉市氏などは喧嘩の教育的価値を認めておるようだが、遊びの立場

からは角力がある。用具の助けはかりないし、裸一貫で  
一対一の力の勝負、土俵という規制のなかで礼儀は正し  
いし勝負は明確、実に壮快な国技である。しかも遊びに  
場所も費用もほとんどいらぬ軽便さがある。もちろん  
幼児には幼児なりの方策が必要だが、なせもつと活用し  
ないのであるか。庭に土がないなら、マットの利用も  
ある。要は、積極的に自分の全力を尽して最後まで頑張  
りぬくその気力の育成なのである。その際、裸になれた  
ら更によいかもしれない。虚飾を棄てた自己の真価の発  
揮だからである。

最近、寒中でも裸で戸外活動する保育があるが、注意  
さえ怠らなければ結構なことだと思う。人間の身体は訓  
練次第で、可能の範囲をぐんぐん拡大してゆくことが出  
来る。体育や競技などの例でも明白である。素足で歩  
く、下駄や草履を穿くというような古い習慣も、健康的  
だと科学で実証すみの今日、われわれはもつと素直に自  
然に即する原点を見なおしてかかることが必要なのでは  
ないだろうか。

ところで園は集団の場、保育の基盤はあくまでも家庭  
でなければなるまい。その家庭教育の軟弱さが、前述の  
ような青少年の多くを育成した土台であったことには、  
ここでは触れぬが、ただ是非とも家庭にその実践を望み  
たいことがある。それは最近文部省でも提言している  
「お手伝い」のことである。

幼児のお手伝いは、邪魔だ、危ない、必要ない、とい  
って、禁止する親が多い。しかし子どもにとっては、そ  
れは遊びであり、同時に実生活参加への実習の一面なの  
である。それによって、自分も大人への仲間入りができ  
たという自負と喜びをかちえる絶好の機会でもある。こ  
れを見すごすのは親の怠慢ともいえよう。某家では、小  
学以前の男の子に風呂の責任を一任した。幼児は水遊び  
が好きだ。設備はスイッチで操作は簡単、掃除は運動  
作業、時々親が保障はする。家族の一員としてのその子  
の役割責任は重い。だが同時に権利がそれに伴ってい  
る。親でも許可なく自由に入浴はできない。今日は風呂  
日でないから駄目と云われたら、ただ承服するより他は

ない。その代り、当番には遊びの中途でも時間に帰って義務を果たす。親子の役割権限の区分が明確になっていくことが、同時に親の権威を認識させるにも好結果をもたらせている。食事の面でも役割があり、母親不在や病臥の折なども不便がなく、家庭生活が円滑に維持されていると云う。

幼児の遊びと日常生活とを無理に峻別せず、楽しみのうちに勤労精神や役割精神などを自然に身につけさせて、人間形成の上に役だたせている好例の一つといえよう。

親離れとか自立とか云うことは、決して親を軽視したり疎外したりすることではあるまい。それぞれの立場をよく理解して、その上で親と連れ添って共に生きてゆくことだ、とするのは間違いであらうか。

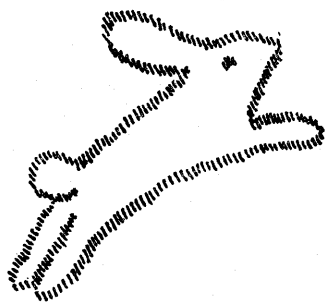
いじめの心理の底にひそむものを、遊びの面からひきあげて、それを幼児の遊びと結びつけてみた結果が、以上のようなものなのである。

#### 参考文献

- △小此木啓吾「モラトリアム人間の心理構造」(中央公論社)
- △小此木啓吾「モラトリアム人間を考える」(中央公論社)
- △D・ジョナスとD・クライン「マン・チャイルド」(竹内靖雄訳「幼稚化の時代」竹内書店)
- △コレット・ダウリン「シンデレラ・コンプレックス」(木村治美訳・三笠書房)
- △ダン・カイリー「ピーター・パン・シンドローム」(小此木啓吾訳・祥伝社)
- △清水将之「青い鳥症候群」(弘文堂)
- △J・N・リーバンマン「遊び方の心理学」(沢田慶輔・瑞也共訳・サイエンス社)
- △守屋光雄「遊びの保育」(新読書社)
- △江木治「昔の子供の遊び」(大陸書房)
- △角田巖「集団あそび」(さざら書房)
- △文部省「現代の家庭教育―乳幼児期編」(ぎょうせい)

「おいしい」

蕪木寿江



「絨毯の上は、今夜食べようとして茹でておいたスパーゲッティと、買ってきたばかりの卵をみんな、なすりつけてしまいました。これでも怒ってはいけないのでしようか、幼稚園から帰って来ても外で遊びたいと言うので、又お散歩に連れて行って来たのに……、何が気に入らないんでしょうねえ——」「——、T先生は『絨毯は洗えばいいでしょう。生命に別状は無いでしょう』と、きつとおっしゃると思うわね。お母さん偉いわね。怒らないで……。あと少しの辛棒よ、Yちゃんこのところ随

分、わかってきたんですもの」「こうやって電話で話しているでもないじゃないんですの。自分のことを言われていると思うんでしょうか」と言って切れた。涙の声ではなかった。涙も出ない程、かすれた声だった。受話器を握ったまま置けなかった。

言葉の発達の遅れているYちゃんが、三月に東京から引越してきた。苦情の多いアパートでは子どもを叱ることも多く、少し位不便でも静かな処なら、「Yも話すようになるかもしれない」と、両方の親が建ててくれた、

と言っていた。

○大学の言語障害研究室のT教授からの簡単な紹介状を持ってきた。幼稚園には行かない方がいいが、弟さんも入園の時期だし、どうしても行きたいのなら、と前もって電話があった。今迄通っていた幼稚園の若い先生も一緒だった。「他の先生にはおんぶしないのに私にするんですよ」と愛情の籠ったまなざしでYとびったり並んで椅子に腰をかけて名残り惜しそうにしていた。

その幼稚園に入る前に保育園に行っていた。三才になるのに言葉が出ないので、早く集団の中に入れてもらいたいだろうと、人の勧めもあって泣き叫ぶのを無理に離しておいて来ると、一人で歩いて家に帰って来てしまう。又連れて行く、戻って来る、を繰り返しているうちに泣かなくなった。あとも追わなくなった。慣れたのだろうと思っただけで預けていたのだが、だんだん無表情になってきたのに気がつかなかった。(お母さんこそが唯一の安全基地であるのに) 下も年子で生まれて手がかったし……何しろ、焦っていたのが悪かったし、T先生を早く

知ればよかったと悔みながら話した。しかし、ここまではバス停で八つもあり、四十分はかかる。一年目は幼稚園バスが止るところまで自転車できた。しかし、このバスも始発から学生で満員で乗れないこともあり、二年目から三輪車で二人を乗せて一時間かかって通った。途中からサイクリングコースになるので、その土手でひと休みしながら帰ったり、弟さんを補助するときの自転車に乗せて前を走らせたりした。

お母さんは過労の為に歯の根を痛めてその手術で休むこともあったが、ここは自分の味方のようなほっとした表情の時が多かった。小さい身体なのに大きなYをおんぶしてみんなを眺めていたりした。先生方も、Yが望むようにかわるがわるおんぶをしては友達の中で遊んだ。

背中のYはぼーっとしていて生気がなかった。これが本当のYなのだ。裸足で走り廻っている時は、一見、活気があるように見えるが、不安で無理をしているのだから。冷蔵庫が好きで、牛乳を呑んだり、お菓子を食べたりした。Yの喜ぶことがしたいと思うので止めることは

なかった。

クラスの子ども達は、「おぼちゃん。Yちゃんがね、おはよう、って言ったよ」とか、「ゆきちゃん、って言ったよ」とか、空想と希望が一つになってよく話しかけていた。「ありがとう」と、お母さんも目を細めて笑うことがあった。子どもには本当に聞こえるのだらう。無心な子ども達にのみ声にならない会話があるのだ。

就学を一年猶予して兄弟で年長組になった。魔の七月が二回過ぎた。夏になると気分が解放的になるのか、暑いから窓を開けてあるからか、夜になると、あつという間に裸足で外へ行ってしまい、やっと探しても追いかけるのと逃げるし、田んぼの中に入って、ドロドロになって連れてきた。お店屋さんのコーヒを飲んでしまった。とか、七月はさんざんだった。

訪れて行くと、Yちゃんのご馳走が迎えてくれた。お皿の真中に小石が盛られ、その周りを二つ切りにした蕪が並び、楊子が挿してあった。「捨てる怒るんですよ。この頃、庖丁が使いたくて、高いじゃがいもみんな切

ってしまうので、それを皮をむいて又、料理するんですの。卵焼きもつくるけれど、お塩をいっぱい入れて食べられなかったり……。でも絨毯にはこすりつけなくなつて家の中もいくらか綺麗になったんですよ」と言われた。

二学期になるとトランポリンを独占して喜んだ。Yちゃんが乗っているとゆきちゃんも走ってきて手をつないで高く跳んだ。Yの力のあるジャンプについていけた。トランポリンの弾むあの空間は心地よく安全な所なのだらう。満揚げに時には声をだして笑っていることもあった。

O大の研究室にYについて行った。三月であった。帰り道、軽自動車の中で私がみかんを渡すと、甘ずっぱい匂いと一緒に、「おいしい」と、Yがはっきり言った。助手席に乗っている私は心臓がドキドキしてきた。大さわぎをしてはいけない、冷静に、と自分自身に言っかけて聞かせるのにやっとなった。お母さんが、「そう、おいしいの」と言った。弟のNちゃんが、「お兄ちゃんが、し



やべれるようになったら、いっぱい遊んで貰うんだ」と喜々として言った。「お兄ちゃんなんかいない方がいい」「お兄ちゃんは死んだ方がいい」と言ってお母さんを困らせていた弟なのだ。いつも監視人のように、お母さんがお使いに行っている時は見張っていないければならない。どんなにつらいことだろう——。運転しているお父さんが、ミラーを見ながら「Yちゃん、よかったね、おいしかったの」と言った。私は又、あの「おいしい」が聞きたくて袋の中からゴソゴソとみかんを取りだして、Yに渡した。息をこらしていたが、二度は聞けなかった。なによりも「T先生に会って話した」という安心感が両親の心であり、その両親と好きな自動車に乗ってゆったりとした気分だったのだろう。

それからは、お弁当の時に、「おいしい」という言葉をたまに聞くようになった。苺を食べる時に、「おいしい」と言った。友達がこの声を聞こうと、二つしか入っていない苺を一つ、一つしか入っていない季節はずれの苺を一つ、とYにあげては待った。夕焼けも好きで、暗

くなっていく山を見た時、「きれい」と言ったと言う。Yの心の中はどんなに美しいのだろう。今は話さなくても、きっと沢山の言葉が……それもきれいな言葉ばかりが楽しそうに並んでいるのだろう。

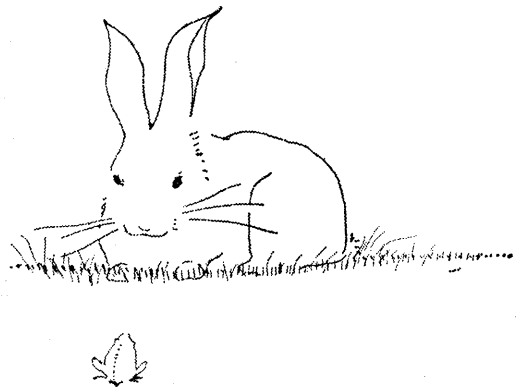
二人の卒園式には、仲よくなったお母さん達と、いつでも別れを惜しんで泣いていた。幼稚園の門の横にいてあるみなれた三輪車の後ろにいつもの小さい布を敷いてY、前にNを乗せて、自動車のしきりに走る中を一生懸命にこいで行った。

(神奈川・市ガ尾幼稚園)

## 大人・子ども・コトバ

「ウサギの子殺し」をめぐって――

森下 みさ子



保育観察の機会は、時として「保育」という甘やかな

大人と子どものかかわりから見落とされがちな子どもの一面を、衝撃的なまでに垣間見せてくれることがある。

次に記す一例も、「大人と子ども」をめぐって、また「子どもとことば」をめぐって、私にいくつかの問いを投げかけることになった忘れがたい事象である。

「ウサギが赤ちゃん食べてる!!」

園庭を歩いていると、突然こんな声がとびこんできた。見ると、ウサギ小屋のあたりには、七、八人の子どもが蠢いている。「赤ちゃん殺し!!」と叫んで、興奮しきった赤い顔をして走り出ている子がいるかと思うと、「えーっどれ!!」と、遊びを途中でやめて駆けこんでゆく子もいる。小屋に近づいてみると、押し合いへし合

い、身をよじらせながら、額を小屋のガラスにくっつけて、よく見ようと皆懸命である。「あーっほらーっ」と子どもが指さす先を見ると、白地に黒い斑点の大きなウサギが、うずくまったまま口をもぐもぐ動かしている。

その口の先のワラの中には、薄いピンク色をした小さな塊があり……目を凝らしてみると、フニョフニョした生まれて間もないウサギの赤ちゃんである。お腹のあたりがへこんでおり、もはや息は絶えている。大きいウサギがちょうど赤ちゃんウサギのお腹のところまで口を動かしているのが、まるで食べているように見える。「トンマ、トンマー」とM子が叫んで拳をふりあげる。それを機に「でたー!!」「人殺しー!!」と叫びながら駆け出してゆく子がいて、固まって蠢めていた黒い頭がパッと散り、あたりは騒然となる。M子が興奮さめやらぬ面持で、頬を赤らめ息を荒げながら、「産んだ おかあさんが、生んだ 子どもを 食べてる」「産んだ おかあさんが、生んだ 子どもを 食べてる」と、一語一語区切りながら、かみしめるようにくり返す。観察に来ていた

学生の一人が、やはり騒ぎを聞きつけてやってくると、M子はやや得意気に大きな声で「あのねー、おかあさんウサギが赤ちゃん食べちゃったんだよ」と説明する。その後すぐ眉をひそめ、さも哀れんでいるような表情で「かわいそー」と付け加える。学生がオズオズしながら「死んじゃったから、じゃないの?」とM子に尋ねると、M子は「ちがう!!生きてたの!!」ときっぱり。学生が今度は「なめてあげてるんじゃない?」というと、「ちがう食べてんだよ!!」と、これまた憤然とした面持で語気も強くい切る。その後M子は、また「かわいそーに」と付け加えると、「みんなに知らせてこよーっと」と、走り去っていった。

このような一事象を通してまず気づかされることは、私たち大人が常日頃「子ども」をどのようなものとしてとらえようとしているかであろう。私たちにとって子どもは、日々成長をとりげいきと活動する。存在そのものが限りなく「生」を謳歌し表現するものであるらし

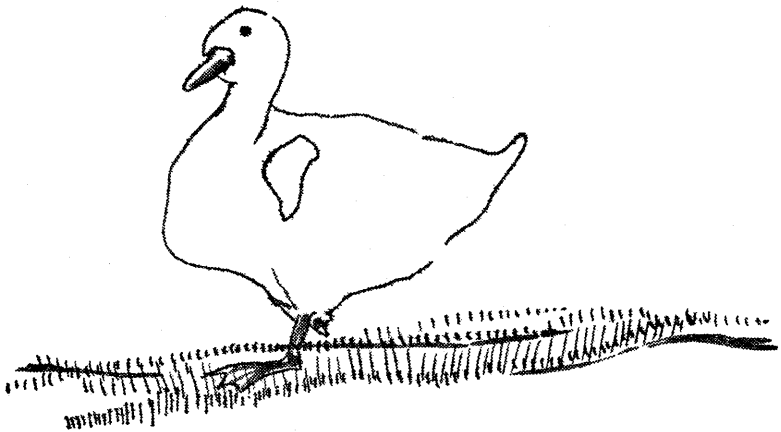
い。「保育」という営みはことさらに、子どもが健やかな生を生きることができるよう細やかな配慮を惜しまない。小動物の死といえども、「死」は保育の場に余程気をつけて持ちこまねばならない。ましてそれが一種の殺害、さらには養い養われる関係の根幹に位置づく母子の間で、母親が子どもを喰い殺すような形で示されることには、不安と嫌悪を感じるのが当然といえよう。観察の学生のM子への問いかけには、そうした大人の側の動揺と、なんとかタブーから子どもを離し「生」を媒介とした穏当な大人と子どもの関係を回復しようとする焦りがある。ところがM子は、そんな大人の側の働きかけを容赦なく切り捨て、タブーの側に身を寄せる。「赤ちゃんが死んだから母親がなめてあげている」という、学生から与えられた解釈を「ちがう!!」と否定し、あくまでも「母親が殺して食べている」と主張して譲らないのだ。ここで私たちは、大人が子どもに着せたがる大人しやかな衣装と裸のままの子どもとのずれに、そしてまた大人と子どものどうしようもなく相克しあう関係に気

づかされる。実際には、母親がどうか定かでない大きなウサギが死んだ赤ちゃんウサギのそばで口を動かしているにすぎないのだから、大人と子どものどちらが事実をいいあてているのかはわからないし、それはどうでもいいことであろう。ここではM子が、母親が子どもを食べるという見え方の方に自分の足場を求め、そこから大人への発言をくりだしていることにこそ目を注ぎたい。

「母親なるもの」が産む存在であると同時に、子どもを呑みこみ再び体内にとりこもうとする恐るべき力の持主でもあることは、「太<sup>グレート</sup>母<sup>マザー</sup>」という名称を与えられて指摘されてきたことである。生命の産出と吸収を司る巨大な力の主体として「母親」は、その両義的なかかわりを、神話・文芸の上に、臨床事例の上に、数限りないしるしとしてとどめてきた。しかしそれは、極めて原初的で、いくつもの文化的なとりきめによって秩序を型づけている日常の社会においては、事例や文芸といった特別な場を借りてとり扱われる以外は、タブー視されるような危険性をたっぷりと抱えこんだ存在でもある。そも

そも母体が新しい生命を産み、守り育て、社会に送り出し、やがてその生命が再生産を行なうという形で社会が存続しているのであってみれば、母体に秘められた同じ力が全く逆の方向に奔流するものでもあると認めることは、社会を根底からくつがえし破壊することに他ならないのだから。

ところがM子は、この力の所在に何と敏感に反応し、それを頑固に主張し続けたことか……。このとき私たちが知らされるのは、「子ども」は、社会的な約束事や文化的な型が覆い隠してしまふ、生命の産出も破壊も同時におこりうるような力の場に、より身近い存在であるということだ。大人は、子どもの裡に目覚めたそんな力に気がつくとすぐさま、こうした秩序からはみ出る力をとどめ、自分たちのよって立つ基盤である文化的・社会的な解釈の型に流しこもうとするけれど、力の奔流を感知した子どもの言動は、簡単にはひるがえらない。こうして「子ども」は、人間にとって原初的・根源的で、それゆえに秘匿される力のありかを告げる者となり、同時に



秩序社会に立つ「大人」への果敢な挑発者ともなるのである。

ところでこの場合M子のことばに着目すると、M子自身の中で興味深い揺れが生じていることがわかる。最初M子は事象を衝撃的に受けとめ、ほとんど狂乱的に「トナー」ということばをぶつけている。このときM子は、日常社会ではあつてはならないことが目の前で生じているのを鋭敏に感じると同時に、そのこと自体にショックを受けている。そこでM子のことばは事象におおいに触発されながらも、秩序社会の側から事象を打ち消すような形で投げかけられている。ところが一時の騒乱を経て、M子はまだ興奮はしているものの、極めてしっかりした口調で「産んだ おかあさんが、生んだ 子どもを 食べてる」とくり返すという。目の前の生々しい事象を、今度は明晰な文章にして、しかも一語一語区切りながら口にするのだ。

私たちはここで、ことばが大変おもしろい働きをしていることに気づかされるのではないだろうか。M子のか

みしめるようないい方からして、ことばが起こっている事柄をくつきりとした形におさめる働きをしていることは明らかであろう。目に映じた衝撃的なでき事を衝撃のままに放置するのではなく、ことばの配列の中に封じこめ、そこに意味をもった一連なりの文章をつくりあげている。これによって、どうにでも解釈できる、それだけにわけのわからない衝撃が身体を突きぬけてゆくような事象は、「産んだ母親」が「生んだ子ども」を「食べている」という、ことばの連鎖の中にカチリとおさめられるのだ。生々しい事象との間には距離が置かれ、事象が放っていた迫力はその分薄められる。しかし同時に、他どの解釈も入りこむ余地のないゆるぎなさをもって事象は説明されることになる。しかもその中身は、先に触れたように相当危険な意味を抱えている。そこでM子がこのようなことばを口にした途端、M子が事象から直かに感じとっていた衝撃力は弱まるけれど、今度は「ことば」の上で意味を明確にした衝撃性が生じてくる。事象そのものの衝撃性からことばの上での衝撃性……。M子

はことばによって、一方では生々しい事象から遠ざかりながら、もう一方では事象に意味を与え、伝達し、周囲に衝撃的な波紋をおこす役割を受け持つのである。

ここでさらに興味を惹くのは、そういいながらもM子がさも哀れんだ口振りで「かわいそー」と付け加えていることである。先ほどの挑発的なことばとは異なり、これは、失われた生命に同情を寄せるといふ、大人の側からも納得のゆく社会的な態度と映る。こうしてM子は、大人との関係を切って、大人がタブーとする事柄を表面化してみせるが、同時に大人の上で立つ社会的な基盤との間に橋をかけようとする。切断しつつ関係をとりもとうとする、その狭間で「ことば」は二つの役割を鮮やかにとりもっているといえよう。

ここには、「大人・子ども・ことば」の三者が織りなす興味深い関係の切り口がのぞいているように思われる。子どもはことばを獲得することによって社会にくみいれられていくけれど、同時に子どもの感覚はことばの力を借りて表出され、大人に対する挑発性を露わにす

る。しかもその際即座に大人との関係をとり結ぼうとするのも、これまたことばの働きなのである。M子のことばが表わしているのは、秩序と反秩序の間で、大きな衝撃を感受しつつ揺れ動いているM子の心である。が、見方を変えれば、M子はことばを操作することによって、狭間の位置で巧みに舵をとっていると考えることもできよう。

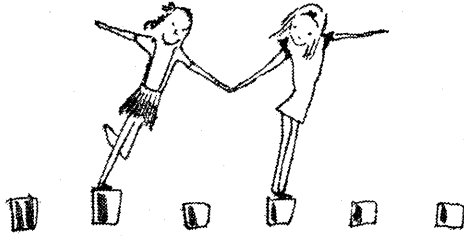
秩序の側でもなく反秩序の側でもない、両者の間を往き交う流れの中で、ことばを頼りにバランスをとりつつ大人との関係をつけてゆく子どもの存在の仕方を、この小さな事例が鮮やかに描き出しているように思われるのである。

(お茶の水女子大学 人間文化研究科)

若いお母さんたちへ

はるにれの会

山本直子



「二番目のお子さんですか？ ずいぶんゆったり育てらっしゃること。」

それが、病院や市の検診にでかけて最初に言われた言葉でした。まわりの子は、わけのわからぬ検診に、ここぞとばかりに泣いている中で、一人興味深げに辺りを見渡しているのがわが子でした。そんな様子から、二番目の子どもとまちがえられたのでしよう。良く言えば神経質に育てていない、悪く言えば手抜きをしているということでしょうか。親としての自分を客観的に見ると、とにかく子育てに気負わないように自然体でやっていこうとしていたように思えます。と、まあ、かっこよく言えばそうなるのですが、実のところ、自分の毎日の生活を、子育てで、埋めつくしたくはなかったというのが本音です。その結果、子育ての本を読むために、子育てを少しわきにおくという本末転倒な状況さえ出現しました。それでも、自分を豊かにすることは豊かな子育てにつながるという大義名分を印籠にし、後ろめたさもちょっとびり加わって、涙の味をする子育て奮戦記が始まった



のでした。

そんな育児の毎日の中で、ともかくも私が大切にしていたことは、この子がこの子であるということ、と、ともに、母親である私も自分であることを大切にしたいと思うようになりました。私のところでは、

おじいちゃんおばあちゃんと同居なので、「親としての自分」を見つめる機会も悲しいかな、たくさんあります。おばあちゃんはいつも言います。

「孫ってかわいいわね。自分が子どもを育てた時には夢中で、子どもがどう育っているとか、おもしろいとか思わなかったわ。でも、孫となると、客観的に見ることができると、かわいいなと本当に思うわ。」

と。その言葉を聞くたびに、私は夢中になっていないな、子どもをずいぶん客観的に観察しておもしろがっているなあ、これでいいのかなあと考えたものです。おばあちゃんは子どもをあやすのが上手で、反対に私は構えてしまっ、あまりうまくいきません。おばあちゃんは編み物が上手で、あっという間にセーターもできてしま

うのに、私は本を読むのが大好きで、編み物も遅々と進みません。客観的に見ても、私はどちらかというとも母親商売にはあまりむいていないなと思うのです。友人に聞いても、わが子は本当にかわいいと言うのに、私はいま一つ母親商売に乗り気ではなく、なんとなくピンとこないのです。今までもこんな体験いくつもあったなあと思ひ返してみると……そうです。指折り数えて楽しみにしていた遠足や運動会が、実際当日になってみると、バタバタと一日が過ぎ、期待したほどではなくて、なんとなく拍子抜けしたという感じに似ています。

そこで私は一種のあきらめでもないけれど、いい母親になるために無理するのはよそう。私は私でいよう。そのかわりこの子がこの子でいようとすることを無理してねじ曲げたりするのはよそう、そう思いました。これは決して、自立のためなどというつき離れた子育てではなかったことだけは弁解させて下さい。

ともかくそういう気持ちで始めた子育てにも、障害物は多くありました。たとえば育児書や昔からの言い伝

え。抱き癖はよくない。指しゃぶりはよくないなどなど。けれども、私は一切を無視しました。泣いている時は泣きやむまで抱き、指しゃぶりもやりたいただけやらせました。十カ月の現在、娘は抱かれると、「自分で動きたい」と泣き、いたずらばかりして指しゃぶりを思い出す心配すら見えます。そして今は添い寝。これも、そのうち卒業していくことでしょう。私はいつも、そうした卒業を待ちたいと思います。そして、もしかしたら、娘も小さな心の中で、私の毎日の卒業を待ってくれているのかもしれない。そんなささやかな卒業のでき事を、今日はお話ししましょう。

数日前のことです。十カ月に入った娘は、突然下痢を始めました。一日に八、六回もうんちをし、そのたびにおむつ、おむつカバー、ずぼん、くつ下などがうんちだらけになるといふ毎日が続きました。病院では、ロタウイルス感染症と診断され、うんちのたびの着がえと洗濯でぐったりしてしまふほどでした。

「一日、二日入院して点滴をしましょう。そうすれば、

すぐに治りますよ。」と、病院で言われた時、私はすぐさま、お願いします、と言っていました。前日から少しくったりしている娘を見ながら「もし、入院と言われたら、すぐにでもしよう。」と主人とも話していたのでした。私も数回入院したことがあり、点滴は大変だけど、それさえすれば隠やかな日々というのを想像していました。ところが、現実には想像とはかけ離れたものでした。点滴が始まるやいなや、「お母さんは、部屋から出て下さい。」と冷たく言われ、部屋の外で、娘の泣き叫ぶ声をじっと聞いていなければなりません。娘は、生まれた時からあまり泣く方ではありませんでした。一人遊びが好きで、毎日ゴソゴソいろいろなところをいたずらをしては、「あらあら」という私の声に、うれしそうにニコニコしている子です。ころんでも「あれ？」というような顔をして、またひとりハイハイの旅に出て、その先でまたいたずら。そんなことのくりかえしで、母親べったりという感じではない子でした。私も特に無理して遊ぶこともせず、娘を追いかけたいはずを楽しんで

見ているという感じだったのです。ところが、いえ、だからと言った方がよいかも知れません。娘は無理矢理何かをされるといふ事を極端にいやがりました。まして、母親のいない所で白衣を身にまとった知らない人々におさえつけられ注射をされる。それは娘にとっては、命の危機さえも感じる恐怖だったのでしよう。今でもあの時の悲痛の叫びは、私の心をえぐるように耳もとに聞こえてきます。私の心をえぐる……。それは、あの時の娘の悲しみがもどってくるからだけではありません。むしろ、私の悲しみ、心の痛みがもどってくるとも言えるでしょうか……。

泣き叫ぶ娘の声を扉の外で聞きながら、私は、いっしょうけんめい自問していました。娘が入院することを、私は娘のためにOKしたのだからか。はやく良くなっほしいというのは、本当に娘のためだったのか。心の隅で、洗濯にうんざりし、夜中起こされることにうんざりし、私のために早くよくなってほしかったのではないか。それで入院を軽く承諾してしまったのではないか。

娘の悲しみに満ちた泣き声は、娘の痛みとともに、私の悲しみを運んできたのでした。私はドアのノブを握りしめて、ごめんね、ごめんね、と泣きました。

あの脂肪のたくさんついた手のいったいどこに針をさすのだろう。そう思いながら、おそるおそる病室に入っていくきました。点滴の針を手の甲にさされた娘は、腕を板に固定され、体中におもりをつけられて、ねがえりはおろか、身動きさえできないようにされてしまいました。針をさした後も一時間は、恐怖のために気が狂ったように泣きました。私はそばに行つて、いっしょうけんめい声をかけたり歌を歌ったりしましたが、娘は私の心を見透しているかのように、私を拒否し泣き続けました。少し静まったかと思うと、このまま気が狂ってしまったのではないかと思うほど、突然ものすごく泣くのです。そして、やっと落ち着いたあと、今度は固定された体との戦いでした。ふだんから活発な娘は、じっとしてることがあまりありません。それが、五時間以上おもりをつけられ、同じ体勢を強制させられたのです。大

人だつてまいってしまふにちがいありません。娘は悲しいほど泣きました。それでも時々あやすと笑ってくれるのが唯一のなぐさめでした。

これではいけない。こんな代償をはらつて点滴をする必要が本当にあつたのだらうか。確かに脱水状態になれば必要かもしれないけど、娘の状態はそこまでいいないといふことは、私も知っていました。「退院しよう……」。大人の食事と同じ時間にいっしょに運ばれてきた冷たい離乳食を食べさせながら、私はそう決心しました。娘は点滴が終つたあと、私から決して離れようとはしませんでした。他の人があやしても、泣いて私にのみついてきました。いつもなら、一人で自分の世界に入つてしまい、私もなんとなくじゃまをしないでお互いを認めあつていた間柄から、突然百パーセントつきあう間柄へと変わつたのです。私は、少々とまどいました。おそらく、母親商売の得意な人には、ごく自然なことなのでしょう。けれども、私には、思ひのほか労力を必要とするものでした。娘もふだんと違つて、いっしょうけん

めい笑つて楽しもうとしているかのよう、ケタケタと何度も何度も笑つてくれました。そして、今まではなかつた新しい信頼関係のようなものが、その時生まれただけでした。

翌日、また点滴をするという看護婦さんの言葉に、私は直接先生のところへお願いに行き、できれば退院したいと申し出ました。先生は、点滴みたい体に良いことを、なぜそんなに拒否するのかと、いぶかしげな顔をなさつていましたが、まあ、お母さんが泣くほどいやな事なら……と、退院を認めてくださいました。

娘をおぶつて荷物を持つて雪の中をとぼとぼ帰る道で、もしかしたら、私はとんでもない間違いをしでかしてしまつたのではないかと思ひました。今日、点滴をしないで、もっと病気がひどくなつたら……、という考えが頭をかすめました。けれども、娘といふ時間が長い私の方が、お医者さんよりも確かだといふある確信のようなものがありました。どこかのヨットスクールではないけれど、「私が治す」といふ感じでした。五時間以上の点

滴のうえに、冷たい食事と殺風景な病室。そんなことで病気がよくなるはずはないという気がしました。娘のきげんの良さが、唯一の私の支えであったことは、言うまでもありません。

ところが、家に帰ってわずか数時間のうちに、十数回の下痢を始めました。それでも、娘のきげんの良さを頼りに、あたたかい食事と快いねむりを保障しようが

ばりました。幸い、翌日には、だいぶん固いうんちになり、峠をやっと越えたという感じになりました。もしかしたら、これは少々危険なかけだったのかもしれない。なぜなら、点滴をしなかったために脱水状態となり、命を落とすという危険も含まれていたからです。けれども、私は、自分を信じようと思いました。

医学などという専門的な分野で、専門家であるお医者



さんから「こうした方がいい」と言われれば、確かに「はい」ときくしかないというところはあります。しかし、お医者さんは、往々にして心と体を切り離し、体を治そうとするばかりで、全人的な治療を思いついてはくれません。同じ危険が、教育という場にも存在するのではないのでしょうか。

点滴、栄養はあるが冷たい離乳食、清潔だが殺風景な部屋。そこには、病気に対するある一方的な見方しかなく、心と体のつながりを考え、共に治していくという視点に欠けています。そして、それを大きく助長しているのは、検査という目に見えるデータの提示なのです。知育偏重と言われる分野も、偏差値というデータが存在し、今や非行から赤ちゃんのしつけに至るまで心や体の分野にもデータをつきつけられるという状況にあります。そのデータという色めがねを通して、目に見える部分の子どもの見がちなのです。そして、自分の育てられ方に疑問を持つ時、自分の育て方に迷いを生じます。自分は厳しく育てられた、だから自分はもう少しやさしく

育てたい、けれども甘やかすとよくないという。過保護は〇〇%で非行に走るといふ。どうしよう。その結果、あんなにいやだと思っていた親のしかり方で自分もわが子をしかっている、などということが起こるのです。そして、私たちは、生物的本能としての子育ての能力を喪失し、自分の中に存在する自然な感情や子育ての「勘」というものを信じることができなくなつて、有名大学の先生の書いた子育て論や、「こうしたらよい子が育つ」などのハウツーものに、まどわされがちです。私は、今回の入院事件で、この「勘」のようなものをも少し信じてもよいのではないかと思うようになりました。データの前には「勘」などという、はなはだあいまいなものは、一笑に付される可能性も大ですが、逆に言えば、所詮データで、人間のわかっているほんの一部分でしかないわけです。「勘」は、確実でないし、確かな証拠もありませんが、人間全体を感知し、データにはない「ある真実」を持っていると思うのです。けれども、私などは、その「勘」自体をすでに失っているように

す。「勘」を働かせる前に、さまざまなかえが頭をとびかい、「勘」の機能を解体してしまうのです。そこで私は、子どもを見つめ、多くの人々から話を聞き、本を続み、その取捨選択に「勘」を働かせるようになりました。つまり、データを数多くインプットし、「勘」で選び、自分の中に同化するまであたためて、新たな「勘」を作り上げるといふ大事業にとりかかったわけです。そして、この「勘」がやっとならざる頃には、娘ももう大きくなって、必要もなくなっているのかもしれない。けれども、この「勘」作りのようなものが、私にとっては親になっていくということのように思えてなりません。

今回の入院はたった一泊二日でしたが、さまざまな事を考えさせられました。その中で一番心に焼きついたことは、それでも娘はここにいてほしいことです。新たな信頼関係の中で、娘は私を許してくれ、待っていてくれました。私たち親が、「大きくなれ、大きくなれ」とわが子を待っているのと同じように、子どもたちも、「大

きくなれ、大きくなれ」と、私たちを待っていてくれるにちがいありません。決してあせることはない。ゆっくり親になろう。ゆっくり、ゆっくり。

入院という大きな出来事も終わり、またもとの静かな生活がもどってきました。けれども、前とは少し違う新しい生活です。それは、ちょうど、同じ場所だけれど、高さが少し違う、「らせん階段」を一階分登った感じがします。

\* \* \*

# 子どもと水

草信 和世

車の多い道路に囲まれて、鉄筋コンクリートの高層住宅に住む子どもたちにとって、幼稚園はひとつの「オアシス」なのかもしれない。

今日は、入園をひかえた子どもたちが、おかあさんといっしょに幼稚園へ遊びに来る「一日入園」の日。私たちがスタッフは、園庭にシャベルをさしたり、「木の汽車」を並べたり、おわんやスプーンいっぱい用意したりして、彼らを待つ。さて、どんな風に遊び始めるかな。

かわいい真っ白のブラウスやスカートを着た子どもた

ちが、おかあさんの手にひかれ、三々五々集まってくる。期待と不安の入り混じった顔で、遠くからじっと私たちの様子をうかがっている子、もう帰りたくなってしまう子、幼稚園が珍しくて、キョロキョロしている子、表情は様々だ。

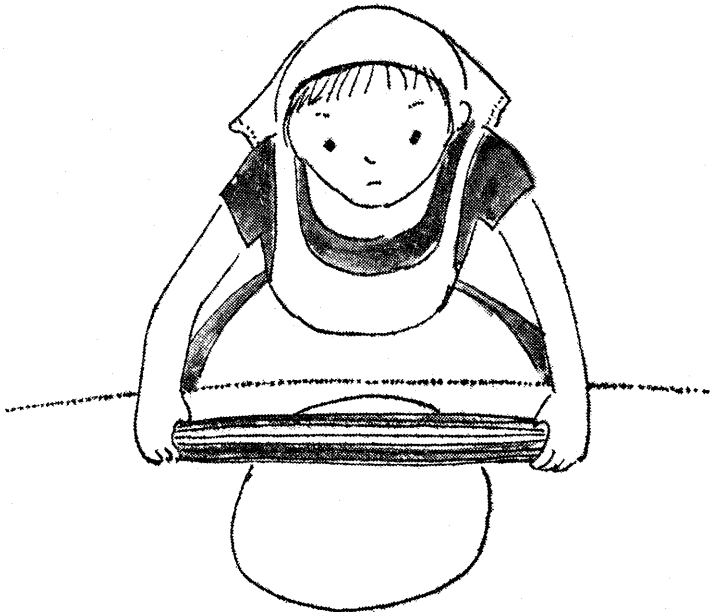
最初、私たちが「あそぼう。」と誘ってもなかなか入ってこない彼らだが、大人が土で山をつくったり、シャベルで穴を掘ったりしていると、次第に興味が魅かれてくる様子がよくわかる。きっかけをつかむと、後はもう大



変。小さな手でシャベルをしっかりと握りしめ、穴を掘り始める。小さな穴、小さな山、大きな穴、大きな山、様々にできると、今度は「ねえ、水入れようよ。」ということになる。「ほく、もってくる、」のかけ声とともに、大なべ一杯の水を、あたりにまき散らしながら、よいしょ、よいしょと運んでくる。次から次へと注がれる、水。はねるのをよけながら、

「かわだ。うみだ。」

もう、大はしゃぎ。ベタベタ。ドロドロ。カーニバルの始まりだ。「もっと、もっと。」の声に、水の穴からあふれ出し、あたり一面水びたし。ついに水道栓は解放され、ひとかかえ程もある「おけ」からは、水があふれ出す。大人たちのつくった「山」にも水がかけられ、その「土砂くずれ」に、また子どもたちの歓声があがる。くつのまま水の中に入っていくものだから、最初はニコニコと笑顔で見守っていたおかあさんの顔も、だんだんひきつってくる。顔を見合わせて、ため息をもらすおかあさん。幼稚園に通うようになったら、洗たくが大変でし



ようね……。

そんなおかあさんたちにおかまいなく、子どもたちは、どろ水の中に座わりこんで平気、実に満足気である。どろ水のついた手で顔をぬぐうものだから、顔はまっ黒。すてきな白いブラウスは、どろ水をすって黒々とし、あわててまくり上げられるし、かわいいスカートはどっふりと重くなつてたれ下がる。子どもがどろと遊んでいるのか、どろが子どもと遊んでいるのかわからなくなる。そして、最後のしめくり……「古タイヤ」をもち出して、どろ水の中に放り込む。パシャーンと音をたてて飛びこむ「古タイヤ」。拍手と歓声がわきおこる。その下で飛んだりはねたりの子どもたち……その度、タイヤの下のだろ水も、いっしょになつて飛びはねる。

春の陽ざしに包まれて、子どももどろ水もきらきらと輝いて見える。

六月。雨の季節。シトシトと降り続く雨に、大人たちは「また、あめ……。」と嘆息する。そんな時、ふと見ると、雨の中にかさが広がっている。赤、黄、桃、色とり

どりのかさが五本、六本と集まって、まるで一つの花のよう……そこから「赤ちゃん、ね。」と小さな声が聞こえてくる。雨の日おままごと。こんな日はお客さんも少なくて、

「ごめんなさい。」

と声をかけると、半分びっくりしたような顔をして、

「いらっしゃいませ。」

一人ふえるたび、かさは一本ずつふえていき、おうちは少しずつ大きくなっていく。

四季折々、子どもたちと水は切りはなせそうもない。

子どもが水を求め、水も子どもと遊びたがっているのだから……。

## 教育実習ノート

◆YさんからK先生へ

○月○日

年少も組

先生方が、工事中の園舎から、建材の入ったダンボール箱を沢山運んでくる。子ども達は早速、家をつくろうとガムテープでつないだり、待ち切れなくて「はやく、はやく」とせがんだり、「鋏が切れないの」と言うのと、けいすけちゃんが、自分のを貸してくれた。子ども達より、いつの間にか楽しんでつくっている自分に気づく。やがて完成、定員四名の小さなお城。——人氣が殺到して、体を小さくして入る。明日はこの回りを塗ろう、とかもっと広くしよう、と話している。どんなふうに発展していくか楽しみだ。こうじちゃん達は、この箱でロボットをつくって、と言う。手

と顔がでるこういうのがいい、と、説明する。なおちゃん、まきちゃんもつくってと言ってくる。

夢中になってつくるが、Y先生のように上手にはいれない。幼稚園の先生って想像が創造につながらなければいけないのだと思う。

◆K先生からYさんへ

○子どもから、創って欲しい、描いて欲しいと言ってきたときは、その意志にそうように創ってあげたいものです。けれど、子どものはっきりした意志がないのに、先生一人でやってしまうのは考案ものです。先生は子どもの創意工夫に従って、子どものあとから創作できる人でなければいけません。

◆YさんからK先生へ

○月○日

桜・桐・ポプラなどの落葉を集めて焚火をする。その回りで手をつないで、「焚火」のリズムをする。ともおちゃんも初めは入らなかったが、まざりたいような表情だったので、誘うとすぐに仲間に入る。「あたりうか……」のところでの火の傍によると砂をかける。「火が消えちゃうわよ」と言うと、「僕は、けむいのを防ごうとしてるんです」と言う。O先生が、やさしく抱っこして膝にのせて、弱まる火を一緒に見ている。

午後からみどり組の部屋で、みんながお別れに、「仲良し喋」をして下さる。みさ子ちゃんの大きな声、たかちゃんもけいちゃんも一生懸命に太陽になってやっている。私の為に心をこめて演じている。ピアノを弾いているK先生の目も潤んでいる。音楽劇が終ってから、みんなが私のところへ来て、「どうして泣いているの」、泣いたらほ

ずかしいよ」と言ってくれる。その時、たかちゃんが、だまって私のぬれている頬を手でぬぐってくれた。急いで顔を洗ってバスを待っている子ども達のところへ行く。いさむちゃんとまおちゃんが、「先生泣いたでしよう」と声をかけてくる。

なんと言おうか、と思っている私に、まおちゃんが「先生、うれしかったから泣いたんでしょ」と言う。私の涙がどういふものであるか、ちゃんとわかっている見ていたんだ。お世話になりました、やさしい心ありがとう。

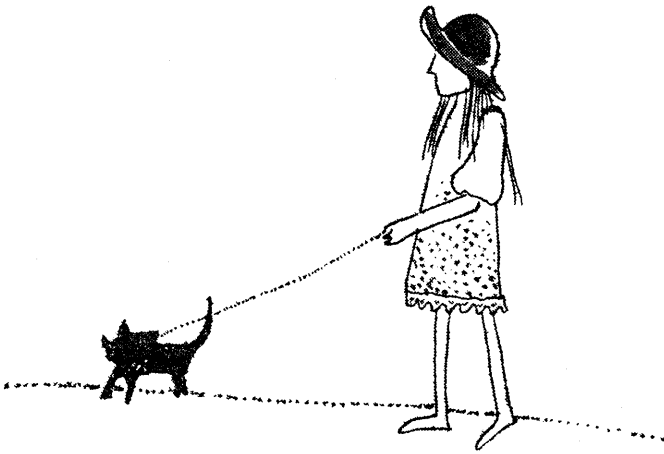
◆K先生からYさんへ

○ともおちゃんの場合、(他にもそういう例がありますが) 何度も注意すると、かえってその中に入っていくてしまい、ぬけられなくなってしまいます。理由があつてのことですし、理解できなくても気分を変えてあげることです。けむいからといってその場から連れてってしまふのではなくて、

せつかく友達の輪の中に近づいてきたのですから、この心の動きを大切にしたいと思います。子どもは誰も、気分転換の名人です。

「仲良し蝶」は、この幼稚園のモットーです。いえ、世界中の幼児教育者の目標でしょう。年長組は、四月、五月、六月、のお誕生会です。うちに、それは劇ではなく、本物のみんなの「ことば」になっていきます。部屋の中だけでなく、お庭でもやっています。年少が見ている、やがて羽根をつけて飛びたちます。沢山の仲良し蝶が生まれて、「とうとうみんな一緒にとめてもらえるところはないのねえ」と言ってみると、雨に濡れて臥せていきます。木の陰から太陽がでてきます。これは男の子のひっぱりだこの役です。十人も太陽がいるときがあります。同じ色の蝶しか休ませてあげない。と言う花の役は人気がありませんが、「共に生きる」ということが、すっかり覚えてしまった

「せりふ」からも実感として、一人一人の心の中に絶えぬ灯として燃えていくことと信じています。



## 子どもたちのこと 五

### T子のなわとび事件

(五歳児)

大橋利恵子

ある日、給食を食べ終わってみんなで戸外に遊びに行こうと靴をはきかえていて、となりのクラスの先生が、

「Tさんがなわとびをゴミ焼き場にすてちゃったと子どもが言っているけど……」と話をしに来てくれた。びっくりした私は周囲の子とゴミ焼き場に行ってみると、本当に2本のなわとびの焼け残りがある。それを手にして、となりのクラスの言い出した子に話を聞きに行くと、確かにT子が投げ入れたのを見たと言う。そればかりか、悲しいことにクラスの友だち数名が確かに入れるのを見ていたと言うではないか、とにかく本人に聞いてみるのが第一と思ってT子の所に行き、「このなわとびがゴミの

中に一緒にあったのだけど知っている？」と声をかけると、すぐあたりまえのように「うん」と言う。教師だけがことの重大さにうろたえてオロオロしていて、本人もそれを見ているがらとめようとはしなかったクラスメートたちはあっけらかんとしている。これはだめだと感じた私は、とにかくT子をつれて二人だけで話ができる部屋に行った。

「どうして、こんなことをしたの？」

こういう時についつい口にしてしまう言葉だが、この質問の意味のなさに気づくだけの余裕もなく、私はその言葉をT子にくり返していた。

かたづけの時間にT子は園庭のゴミ拾いの当番だった。バケツをもって歩いていくと、年少組のなわとびが2本落ちていたので、焼却場に入れた。というのがT子の話であり、ゴミとゴミでない物との区別がつかなかったのか、どうしてそんなことをしようと思ったのか等々、何もわからない。周囲の子のことも気になるので、とりあえず、T子を園長先生に事情を話してあずけると、保育室にもどった。そして、T子がなわとびを入れるのを見ていたと言った子たちに話を聞いた。

「友だちが池の中に入ろうとしていたり、誰かよその人の物を持っていきこうとしたらしたら、だめだよってとめてあげなくてはいけないし、もし大変なことが起きたらいそいで先生にお話をしてくれることになっていたじゃない。誰かケガをした時だっていつもみんな大いそぎで知らせてくれるでしょう。」

そんなような話をする内に、その子たちの中でT子に対する友だちという気持ちがあ  
ごく薄く、友だちとして受け入れられていないのではないかと気づかされ、すごく不安  
になった。

T子はふだんよくままごと遊びをする。砂を使ったり、草を使ったり、室内でスカ  
ーフやふる敷を使ったりして、工夫しながら遊んでいる。また、じゅず玉のネットレ  
スを作った時など、他のどの子よりも手早く、数多く仕上げていた。しかし、一方  
は何かと注意されることの多い子で、くつが放り出してあったり、話をきかずにおし  
ゃべりをしていたり、ならぶと前の子にいたずらしたりして、集団生活のルールを守  
れなかったり、自分の身のまわりのことがきちんとできなかつたりする。何より困  
るのは、トイレが近くすぐにもれてしまう。それでもそのパンツをはきかえずに少しぬ  
れたままで平気であることである。その為にそばにいくと臭いがあると書いていやが  
られてしまうのである。

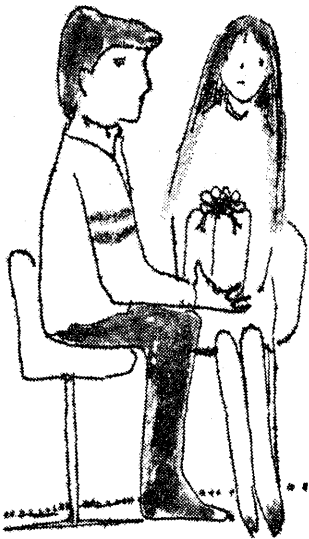
T子は4才児クラスまで両親が別居し、母親と姉と暮らしていた。母親は精神的に  
不安定でT子に対し充分教育的であったとは言えない。4才児クラスの終わりころ、両  
親の離婚が成立し、T子は父親とその祖父母の家に姉と共にひきとられた。やさしい  
おばあちゃんや現在の環境はそれなりに充分だと思われるが、T子の心のすみに母親  
への思いが残っているのもまた事実のようである。

そんなことから、T子の生活習慣の自立は遅れても仕方がない状態ではあった。し



かし教師としては、そのままでは決して思えない。必然的にことが多くなり、T子は悪い子というイメージを周囲の子に与えてしまったようである。私は、T子の行動をだまっていた子たちに「T子ちゃんだって友だちなのだから、もっと一生懸命とめてあげなくては」と言いながら、その言葉が宙を舞っているのを感じていた。

何とだめな教師だろう。T子のことをどうしてちゃんと見つめられなかったのだろう。このことを言う前にもっと親切に手を貸してあげればよかった。T子がなわとびを投げこんだのは、周囲の子たちへの反発なのか。母親へのもやもやなのか。それとも理性のないいたずらなのか。とうとう私にはわからないままT子は卒園していつてしまった。「一年生になったらがんばるのよ。」と言ったら真剣な顔でコックリうなずいたT子。良き友だちを得て、すこやかに伸びてくれることを心から願っている。



# ヤミ族の子供の問題

## から学ぶこと

乾 淑 子

近年、低開発国への援助等の問題が、一般の耳目をも集め、それに関する論議も活発になったのは、好ましいことです。そしてそれらの論議のほとんどは、純然たる好意から発したものであるにもかかわらず、私には、どこか釈然としないものが感じられるのです。

それらの論旨の第一段階は、困っている人達には与えるべきだというものであり、第二段階は、実効の上がる与え方を工夫して与えるべきだ、第三段階は、彼らから私達が奪ってきた歴史を思えば、与えるのは当然だ、とだんだんと与えられる側の立場や問題について深く考慮してきていることは確かです。しかし、どこまで行っても、与える私達と、与えられる彼らという図式がついて廻っているように思われて、私には納得がいかないのです。

異質の文化を持つ者同志が接触すれば、そこには必ず何らかの形でのカルチャーショックがあるわけで、それは決して一方的なものではなく、相互に目に見えないショックの行き来が往復し合うのではないのでしょうか。私

達が「与える」時には、私達もまた「与えられている」ものが沢山あるはずです。そのことを忘れて「与える」立場だけに立ってものを考えるのは不遜な行為のように思われてなりません。

私は以下で、台湾のヤミ族の子供に関する問題のいくつかを語ろうと思うわけですが、このような文化人類学的考察においても、単に彼らの文化を調べ、記録し、保存するという意義だけでなく、彼らの文化を知ることによって、私達が教えられるものを考えながら、筆を進めたいと思います。もちろん、私の考察が正しいとはいえない点もあるかもしれませんが。それについては改めて御指摘をいただき、考えるよすがとしたいと思います。

◆ ◆ ◆  
さて、ヤミ族とはどんな人達かと言いますと、台湾の南東の離れ小島に住む人口二七〇〇人ほどの少数民族です。台湾本島の原住民達と違って、漢化される機会が少なかつたものですから、現在でも比較的古い生活形態

が残っていて、文化人類学者達には格好のフィールドです。中でも日本人研究者達にとっては、彼らが日本語を話せる（日本領時代の学校教育の成果というわけです）ので、とても都合がよいのです。

子供の問題を考える順序として、最初に来るのは、まず、子供が生まれるか否か、ということでしょう。素朴な民族の常として、ヤミ族も豊穰と多産を願います。不妊は深刻な不幸の一つであるわけです。しかし、日本の私達の社会と違って、その問題への対処は実に合理的です。結婚して、二―三年たつても子供に恵まれなければ、別れて、新たな結婚相手を求めるのが普通のこととされているのです。

現代の医学的統計においても、夫婦一〇組（妊娠を望むカップルのみを対象として）のうち一組は不妊であり、その三分の一は女性の側の肉体的上の問題、三分の一は男性の側の問題、残りの三分の一は頸管粘液不適合などの特定の相手に対する不妊と、肉体的欠陥は認められない原因不明の不妊とされています。つまり、不妊に悩

む三カップル計六人の男女のうち、四人までは、相手を替えさえすればたぶん子供には恵まれるわけです。ですから、ヤミ族のような判断で、三分の二の人が救われるのですが、それをそのまま、今の日本の社会に取り入れるというのではありません。

日本ではまず、生涯に一人の相手を守ることが美德とされる風習があり、又、女性にとっては生活の保障としての結婚という意味もあります（その是非は、この際問わないこととして）。ヤミ族のように離婚と再婚が社会的に不名誉ではないという状況や、女性は自分の田畑を母親から相続しており、経済的に自立しているという背景がない限り、難しい問題です。

しかし、私が彼らに学ぶべきだと思うのは、子のない夫婦の離別に際しての彼らの表現です。それは「運命が悪いから別れる。」という言葉であり、その言葉を生む考え方です。彼らにとって離別は、決して「三年子無きは去る。」といった一方的差別感に基くものではなく、男女どちらが悪いのでもない、運命が悪い、という解釈なの

です。可能性から言えば、既述の現代医学的な立場からも公平で科学的な判断といえましょう。更に一歩進めて考えれば、例え、現代医学的手法によって両性が検査を受け、どちらかに原因があると判明したとしても、だからといってその人に責任があるというべきではないでしょう。（医療の現場において、気安く、「責任」という表現が用いられるのに、心寒い思いをしたのは、私人ではないと思います。）その人も「生めない」という運命を持っているだけなのです。ヤミ族の考える通り「運命が悪い」のです。

更に、三回、四回と結婚を繰り返すうちに、どうしても子供を持ってない男。女もいて、彼らは徐々に子を持つことをあきらめていくわけですが、それは、本当に運命だという深いあきらめです。このあきらめもまた、私達が学ぶべきものの一つではないでしょうか。

現在の不妊治療には、まだまだ危険な冒險的要素が多く含まれています。排卵誘発剤によって生んだ双子の両方が知恵遅れであることを知った時の母親の嘆きや自責

などを耳にして、恐しい思いをしたことがあります。幸運にも健全であった五つ子や四つ子がもてはやされる陰には、このような不幸な試みもあったことを無視してよいものでしょうか。拙速よりも、巧遅の道を選ぶべきだという判断に、私も組するものです。

人口の増加や働く女性の増加に伴い、自ら生まぬことを選び取るカップルさえある現代なのですから、子が授からぬも運命として、それなりに人生を充実させる方途を求めるのは、さほど難しいことではないような気がします。



さて、無事に子供が生まれると、親は子に名をつけるわけですが、第一子が誕生すると、父母はそれ以前の名を捨てて、その子の父を意味する「シャマン○○」、母を意味する「シナン○○」と呼ばれるようになります。

(孫が生まれると、祖父母は共に、シャブンです。) こういう呼び方は、程度の差こそあれ、どの民族でも用いら

れています。ただ、それが社会的に正式な名である場合を、文化人類学上はテクトノミーというのだそうです。

私が五九年に、ヤミ族のある村を訪れた時、近所のおばさん達が大声でおしゃべりしていました。

「あそこに来た娘は誰なの？」

「いや、あれはシナンタオだよ。」

それは、つまり、私共にはタオという名前の子供がおりまして、私の夫はその村ではシャマンタオと呼ばれていました。ですから、初めて見た私を何という名の娘かと尋ねたおばさんに対して、もう一人が、シナンタオだと答えると、ああ独身の女ではなくて、あのシャマンタオという日本人の妻なのか、と了解されたわけです。

このような生涯に二度、三度と変えざるを得ない命名は、私達のような社会の中で仕事を持つ人には、不便極まりなく、とてもここから学ぶものなどなさそうに思えるかもしれません。しかし、少なくとも父や夫の名を冠して孝標の娘とか、道隆の妻と言われるよりは、明るく開かれた社会における命名だといえそうです。父や夫の

権勢によって背較べさせられているような名より、子によって親にでもらったという自覚を促してくれそうな名の方が、私には好ましく思えるのです。そして、ヤミ族の名が生涯の途中で変わることに不便を言うのなら、結婚によって姓を変えさせられる有職婦人の不便さをも男性諸氏に想像していただきたく思います。



さて、子供が順調に育っていくために不可欠なのは、栄養です。本来、子を産んだ女なら、ほとんどすべてが母乳を出せるはずなのに、新生児と母親が隔離される病院出産のあり方や、バストラインの方を重く見る母親の出現によって、現在の日本では半数ほどの赤ちゃんが粉ミルクを飲んで育っています。その一方で母乳を再評価しようという近來の動きの中で、粉ミルク消費量の上昇をあきらめざるを得ない乳業メーカーは、発展途上国に販路を求めました。その結果、ヤミ族にも最近は、粉ミルクを飲まされる赤ちゃんが沢山います。五六年春に私

が初めてヤミ族の村に泊った時にはほとんど見られなかった哺乳瓶が、五九年秋には、かなりの家庭で使用されていたのです。

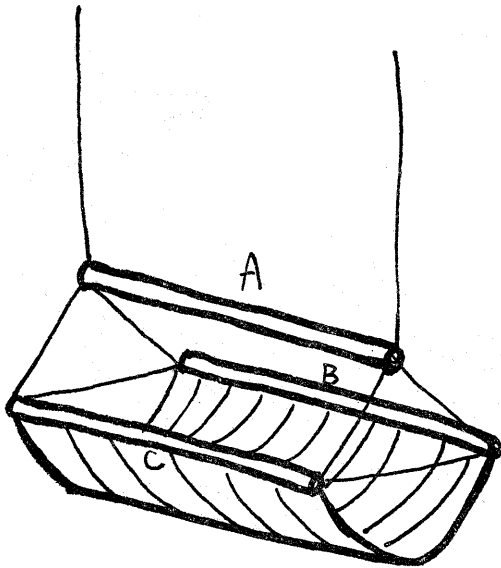
そこで問題になるのはその衛生管理です。現金収入が少ない彼らにとっては高価なミルクですから、赤ちゃんが飲み残しても、捨てるのか、代りに誰かが飲んでしまうというようなことは、一応指導されても実行に移せることではありません。その結果、赤ちゃんは半分腐りかけたようなミルクでも、もったいないから、飲まされるわけです。私も実際に、三十度の気温の中で、四時間ほど放置されていたミルクを飲ませてしまったのを見ました。こういうことは、本当に乳業メーカーに反省していただきたいと思えます。本来不必要だったものを無理に持ち込んでニーズを作り、消費させようというのは、結果的に相手を傷つけるだけなのですから。

しかし、こういう販売方法に対して疑問を一度持てば、実は私達自身もそのようにしてものを買わされていることに気づきます。テレビのコマーシャルしかり、訪

問セールスマンしかり、もちろん日本の赤ちゃんが粉ミルクを飲むに至った事情もしかりです。恐しいことに、もう日本人の女性の半分は、母乳が出ない体にされてしまったのです。人の体の機能は、使われなければ退化していくという法則にのっとって考えれば、こういう状況を三〜四世代続けて、母乳の出る女性が稀少な存在になった頃、戦争や災害などで粉ミルクが手に入らなくなつたとしたら、赤ちゃん達は飢えて死ぬ他ありません。種としての人類の生存の問題に関わるかもしれないのです。日本ではすでに、粉ミルクを飲んで育つた世代が出産、育児を経験するようになっていきます。母乳を飲まなかった女の子が母親になった時に母乳を出せる割合がどのくらいなのか、統計をとってみれば、対象群とは有意の差が表われるのではないかという気もします。



赤ちゃんの育児に関して、近代的文明の持ち込んだもう一つの弊害に、頭がいびつになってしまふ、というこ



とがあります。ヤミ族には、もともと図1のような形の揺りかごがありました。BとCの二本の棒の間に張られた布の上に赤ちゃんを寝かせておき、Aの棒を持って揺ると、赤ちゃんは眠ります。この揺りかごと赤ちゃんは左右どちらにも傾きようがないのですから、頭がいびつになるという心配は、本来ヤミ族にとって考えられなかったことです。

ところが最近、台湾本土から買ってくるようになった図2のような揺りかごに赤ちゃんを寝かせることがはやり始めました。これはぐるっと一周して折れ曲った金属のパイプの間に布を張ったもので、Aの部分を押し下げることによって、赤ちゃんは上下に揺られて気持ちよく眠るしくみです。これだと、赤ちゃんによっては、左右どちらかに首を傾げる癖のつくこともあり、頭がいびつになってしまいます。日本の赤ちゃんでも平らな所に寝かされていて、頭がいびつになってしまうのはよくあることです。しかし日本では、それなりに癖を矯正する方向から採光するとか、人があやしかけるとか対策が講じ

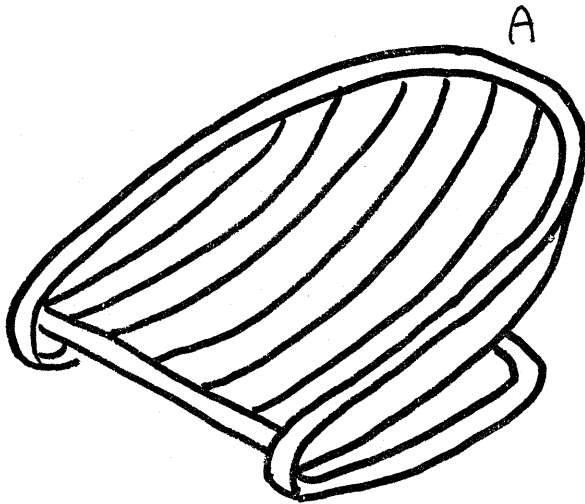


図 2



られています。ヤミ族には元来そういう悩みはなかったもので、対策を知りません。一つの文化の体系に新しいものが加わっていく時には、それに伴う諸種の問題への対応も、共に入れていかなければならないということ、よく考えるべきでしょう。

ついでに言えば、図1のような揺りかごを現に赤ちゃんの頭の形で悩んでいる日本の御家庭で採り入れることを考えてみてもよいと思います。前後のすき間から赤ちゃんを落とさない工夫や、つり下げる紐や棒の強度などいろいろと試みなければなりません。一つの可能性としては考えられるでしょう。



このように、子供の問題を考えると、ごくまだ最初の赤ちゃんの段階までも、私達がヤミ族に学べることが随分あるのに気がつきます。私自身がまだ一才半にしかならない子供を一人持っただけの母親なものですから、自分にとって身近な問題にどうしても目がいつ

しまいました。しかし、それなりの問題意識を持って見れば、三才の子の保育についても、何か教えられることがあるように思われます。

児童学や保育学、助産学などを学ぶ若い方々には、飢えや戦争で苦しむアジア、アフリカの子供達のためにボランティア活動をなさる心優しい友が数多いのは耳にしている所です。その方々が、彼の地での活動に入られる際に、「与える」だけでなく、「与えられる」可能性についても心の準備をしていって下さればと、拙文をしたためた次第です。

(お茶の水女子大学 人間文化研究科)

中村雄二郎氏の『術語集』（岩波新書）

が版を重ね、既に何十万かの読者を獲得しているという。氏が、西欧近代主義が置き去りにしてきたパトスに光を当て、パトスの知の復権を提唱した哲学者であることはよく知られている。パトスとは、一般にロゴス（理性）と対比され、ロゴスが意識の客体的な面であるとすれば、主体的な意識はパトスとして扱われる。人間をその全き現象性において捉えるべく、パトスの意識を強調した先人は、三木清であったという。

氏は、これをふまえてつさらにギリシヤ語の原義に即して意味を敷衍し、その身体性と受苦性に光を当てる。すなわち、人間が身体を持った存在である以上は、外界からの働きかけに身をさらし、そのゆえの激情に囚われ、痛みや苦しみを被ることも避け難い。しかし現代人は、人間の強さだけを前提とした分析科学的な知を基盤として、ひたすら、それ

らを克服し支配しようとしてきた。この限界がいま漸くあらわになり始めていることを思うなら、改めて、受動・受苦・痛み・病いなど、人間の弱さの自覚に立ったパトスの知が顧られねばならないだろう。人間が、受動的、受苦的存在であるとき、他者や自然は対象化され操作されるのではなく、それらと相互主体にコミットしつづきいきと関係し合うことが可能となるのだ。従って、パトスの知とは、広い意味で、臨床的な知と言い得る。

以上の説明は、いうまでもなく、氏の『術語集』から抽出してまとめたものであるが、ここで、私どもは、改めて気付かされるだろう。現代の尖端的な哲学や思想の潮流が目指すものと、保育の世界が追求してきたものが、見事なまでに重なり合うということに……。そういえば、倉橋惣三、津守真と迎られる保育界の指導者たちは、何と「パトス的」であることだろう。

(H)

幼児の教育 第八十四巻 第七号

七月号 ◎

定価三五〇円

昭和六十年六月二十五日 印刷

昭和六十年七月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子  
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレーベル館にお願いいたします

幼児をのぼす

# 指導のポイント シリーズ〈全10巻〉



B6判・セットケース入り・平均208頁

セット定価9,600円

保育をするに当たって、保育者としてこれだけは身につけておきたい基礎的な考え方や、保育のおさえところを解説したものです。保育目標を達成するための保育計画作成という大きな仕事に対して、初心者に分り易くするために、領域的な考え方を取り入れて、作成方法をまとめた実践例つき指導書です。

## 微妙で大切な保育の坎どころを、 読みとりましょう。

- |                          |                           |
|--------------------------|---------------------------|
| ①保育の視点—ここがポイント<br>海 卓子・著 | ⑥自然の指導—ここがポイント<br>小山孝子・著  |
| ②指導計画—ここがポイント<br>高杉自子・著  | ⑦ことばの指導—ここがポイント<br>阿部明子・著 |
| ③絵画の指導—ここがポイント<br>林 健造・著 | ⑧ごっこ遊び—ここがポイント<br>笠間典美・著  |
| ④音楽の指導—ここがポイント<br>早川史郎・著 | ⑨園 行 事—ここがポイント<br>仲田あつ子・著 |
| ⑤体育の指導—ここがポイント<br>三宅邦夫・著 | ⑩母親対応—ここがポイント<br>本吉圓子・著   |

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

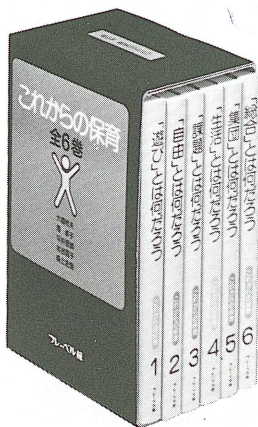
子どもの心と明日を考える  
キンターブックの  
フレーベル館

# これからの保育

〔全6巻〕 大場牧夫 海 卓子 平井信義 本吉園子 森上史朗 共著

A5判 軽装判 セットケース入り

各256頁 セット定価9,600円



平易な文章で語りかける全6巻・保育の実例や座談会などが豊富に入っていて、読みやすさ抜群です。

若い先生も、ベテランの先生も、原点に立つてもう一度保育を考え、基本的な問題を考えるために必読の書です。

## 内容一覧

### 第1巻 〈これからの保育1〉

#### 「遊び」とは何だろう

- 1章 遊び遊びというけれど
  - 2章 遊び・学習・仕事・労働
  - 3章 お遊びと遊びのちがひ
  - 4章 遊びに課題は不要?
  - 5章 遊びと生活環境
  - 6章 遊びを育てる保育者
- (付録) フレーベルのとらえた遊びとは

### 第2巻 〈これからの保育2〉

#### 「自由」とは何だろう

- 1章 保育者の好きな自由ということば
- 2章 自由という名の不自由保育
- 3章 くさりにつながれた子どもたち
- 4章 自由についてもう一度
- 5章 子どもの発達をみつめながら
- 6章 遊びの中の自由とは

### 第3巻 〈これからの保育3〉

#### 「課題」とは何だろう

- 1章 課題について考えよう
- 2章 大きな課題と小さな課題
- 3章 子どもは課題をどう受けとめるか
- 4章 遊びから課題、課題から遊びへ
- 5章 大切な家庭との連携プレー
- 6章 受身にさせない課題の与え方
- 7章 子どもの生活の中から

### 第4巻 〈これからの保育4〉

#### 「生活」とは何だろう

- 1章 子どもたちの生活をもつめる
- 2章 園も生活の場所
- 3章 子どものための子どもの生活
- 4章 子どもの生活をつくるために
- 5章 感動ある生活を求めて
- 6章 園・家庭・地域そして生活
- 7章 保育者の生活感

### 第5巻 〈これからの保育5〉

#### 「集団」とは何だろう

- 1章 個と集団について考えよう
- 2章 園という集団の中で
- 3章 まず、個からはじめよう
- 4章 型にはめない集団づくり
- 5章 問題児というレッテル
- 6章 問題児を生む保育者

### 第6巻 〈これからの保育6〉

#### 「総合」とは何だろう

- 1章 総合のとらえ方、考え方
- 2章 総合活動と子どもの要求
- 3章 広がり、深まり、まとまり
- 4章 総合のとらえ方とカリキュラム
- 5章 保育の中の総合活動
- 6章 系統と発達のすじみち
- 7章 保育の流れと系統性

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館